

とある男の日記

ラーメン屋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

流星街に転生した男の日記

目次

捨て子日記	1
捨て子日記	p. 2
捨て子日記	p. 3
新人ハンター日記	23
新人ハンター日記	p. 2
新人ハンター日記	p. 3
新人ハンター日記	p. 4
シズク ムラサキ	50
ビスケット クルーガー	54
新人プロハンター日記	65
シャルナーク リュウセイ	71
死闘	75

捨て子日記

×月×日

インクの残っているペンと白紙の多いノートを拾えたので文字の勉強のために日記を書くことにした。

俺の名前はケイ・サトウ。前世は普通の日本人、今世は捨て子ホームレスという人生ガチャの敗北者です。転生した場所は、ゴミで溢れかえったスラム街という本当に生まれながらの敗北者です。転生してすぐは日本と異世界のギャップがひどすぎて「あー今日死ぬな」と思いながら日々を必死に過ごしてきました。そうして必死に生きて今では10歳。

ホントに頑張りました。将来的には、こんな場所から抜けて金持ちになって贅沢三昧の暮らしたいです！

その為にもこの日記は忘れず書く！

×月×日

前回から1週間経った。

習慣付いていないのが原因だけど、三日坊主どころか一日で忘れるのは流石にヤバイ……。これからは飯食った後に書くことにする！

今日は、いつもより早く飯にありつけた。

×月×日

今日は、飯を盗もうとする奴らと会った。返り討ちにした。

×月×日

今日の飯は、カラス。

×月×日

今日もカラス。

×月×日

今日は、カラス。

×月×日

今日は、新しい服を拾った。

×月×日

俺の日記をシズクに見せたら書いてること少ないから勉強になつてないって言われた。

ムカついたけど確かに勉強になってねーかもとは思った。

逆に何を書けばいいか聞いたたら、ソレは自分で考えてって言われた。いや、それは教えてくれや……。

とりあえず、自分の住んでる場所について書こうと思う。

【流星街】

ゴミで溢れかえったスラム街。どんなゴミでも落ちてる。食べかけのハンバーガーや少し残ったコーラ、穴の開いた革靴、底の抜けた鍋、マガジンのない銃、たわし、死体、賞味期限の切れた飲み物、錆びたナイフとか色々。

正直言つて、俺が捨てられたのが流星街で良かったとは思ってる。

他の綺麗な街の路地裏とかだったら、拾えるものが無くて確実に死んだ。まあ、ここがまともな世界だったら孤児院とか児童養護施設とかまともな施設に一時保護されてた可能性はあるけど……流星街とかいうバグ発生してるし一時保護ルートは無さそう。

字面だけ見たらマジでクソみてーな街だけど、拾えるものには困らないから必要最低限の生活を送ることは出来るし住めば都。

×月×日

今日は、オオカミみたいなやつ。四つ目だった

×月×日

この前返り討ちにしたやつが勧誘に来た。マフィアがうんたらか
んたら言ってた。
返り討ちにした。

×月×日

今日は、片方割れてるメガネを拾った。シズクにあげた

×月×日

今日は、久々にパンを食べた。カビが生えてたけどうまかった

×月×日

今日は、作戦会議をした。議題：これからどうする？

色々話したけどとりあえずは13歳になったらハンター試験を受
けに行くことになった。

正直言えばもつと早めに行きたかったけど、俺とシズクの姿がガキ
過ぎる。昔、近所にいた金髪あんちゃんとは年齢制限ないとか言ってた
けど……さすがに限度があるというか今の状態で行っても合格でき
るような試験ではないと思う。

たとえ流星街なんて言う世界屈指の魔境に住んでも、試験も負け
ず劣らずの世界トップレベルの難しさって言ってたからなー。

まあ要は急がば回れってことで、明日からきつめの訓練にすつぞ。

×月×日

今日はカラス。

×月×日

犬。

×月×日

今日は、大きめのバッグを拾った。どこも破れてない頑丈なやつだった。大収穫

×月×日

勧誘みたいな奴が勧誘じゃなかった件について

どうやらこのゴミ街の人たちは地域住民同士でしつかりとご近所づきあいの繋がりがあるっぽい。俺が考えてた以上にまともな人間関係もあって、長老とか呼ばれる大統領みたいな流星街のトップみたいな人もいるらしい。

今までシズクと二人で人と会わないように暮らしてたせいで気付かなかった。

頭の根底に周りにいる奴らは危険でいつ何をしてくるか分かったもんじやないって考えがあったからなー。めちやくちや必死になつてたけど、よくよく考えればいきなり襲ってくる奴いなかった

3年前くらいまで近所で住んでたあんちゃんも普通に色々教えてくれたし……。

おっさん達は俺達が居るのに気づいて仕事斡旋に来た優しい強面だった。なんでも子どもの俺達を見て仕事が無くて困ってないか聞きに来たらしい。優しい。初めて会った時も普通に話しかけようとしてくれてただけで別に襲おうとしたわけではないらしい。優しい。

仕事がないならマフィアの仕事を斡旋するぞって言うってくれたけ

ど、今の状態で普通に暮らせてるしハンター目指してるから大丈夫って言ったら応援してくれた。

——マジ優しい。

×月×日

久々の戦闘訓練。

シズクが強くなってた。負けはしなかったけど、強かった。

×月×日

今日は、飴玉拾った。

シズクと分けた。やっぱり甘い食べ物ってうめえな

×月×日

猫。

×月×日

魚食べたい。

外に出たらシズクと寿司を食いに行こうと話した。

×月×日

シズクが戦闘訓練を増やそうと言ってきた。

なんでもハンター試験に一発で合格したいかららしい。俺も戦闘訓練増やしたかったし丁度良かった。

そーゆーこつてえこれからは毎日やってやんよお。

×月×日

戦闘訓練一日目 回避訓練

とりあえず俺が投げた石を避ける訓練を始めてる。なんかのボクシング漫画で見た気がするし見た感じ訓練してる感あるから楽しい。

×月×日

戦闘訓練二日目 回避訓練

引き続き訓練中。今のところ10分くらい避け続けられる。シズクも訓練のおかげで成長してるって言ってたしこのまま続けても大丈夫そう。

×月×日

訓練三十日目 カラスハント

今までは、とにかく攻撃を避ける訓練をしてたけど、そろそろ次のステップに移りたいという事で、俺のルーティーンであるカラスハントを今日から実施。

正直カラスを殺すのはかなりの訓練になる。流星街のカラスは、特別性なのか異常な動き方をする。とにかく速いし危険察知能力も高い、図体も2メートル以上と大きく、普通に戦ってちやまず勝てない相手となつとるわけですよ。

対人経験はあっても動物に関してはそこまで経験のないシズクだとかなり苦戦すること確定だ。だからこそ今まで以上に勉強になる訓練になると思う。

あと、倒すことで飯の調達もできるとかいうコスパ最強。

×月×日

戦闘訓練四十五日目 カラスハント

シズクはまだ手古摺っている。けど、目を重ねるごとにコツを掴んで来てるのか動きが洗練されていってる。ぎこちなさが少しずつ消えて行っている。効率的に体を動かす方法を学んでるって感じだ

なー。

あと飯に困らないの最高。

×月×日

戦闘訓練六十日目 化け物ハント

今日からカラス以外の化け物を狩っていく事にした。理由は、カラスが夕飯に上がるのをもう見たくねーからッ!!!なんで無駄に狩ってくんだよ!そんなに毎回食ってたら飽きるって!もうカラスを持つてくるのは止めてくれ!あと——

誰かオラに調味料を分けてくれッ——!!!

×月×日

戦闘訓練百日目 化け物ハント

強そうな化け物を見つけては勝負を挑むというバトルジャンキー生活。化け物が目に入れば訓練と評してケンカを売り殺すという生活をしていると、流星街での害虫駆除業者と呼ばれるようになった。

化け物狩りで訓練になるしお金もたまに貰えるという最高の生活。

×月×日

戦闘訓練二百日目 化け物ハント+組み手

そろそろ対人訓練も復活させようという事で、とりあえず化け物ハントをしたら夜から組み手をすることになった。

久しぶりにまともな組み手をしたけど、めっちゃくちや強くなってた。少し前とは段違いだった。正直少し前なら片手でも倒せる自信があったけど、今は——普通に片手で出来ますけど?

シズクよ、オヌシが一步進めばワシも一步進む。五十歩進めばワシも五十歩進む。つまり……俺も強くなってるってことだあ!!!

甘かったなあ
!!!!!!

×月×日

戦闘訓練三百日目 組み手

シズクさん成長速度どうなってるの？あいつの一步50メートルくらいあんだろ。片手どうこの話が一瞬で消えていきました。なんで、普通に打ち合えてんだ。お前おかしいよ。

俺の今までの頑張りを返せー。

×月×日

戦闘訓練四百日目 組み手

まだ、まだだ、まだ俺は負けられない。こんな所で躓いてちやダメなんだ……クツそがあ！もう少し、ほんの少しだけ俺に負けてくれシズク。俺は、もっと先輩面してお前を煽りたいんだあ！

だから、俺はこんな所で負けるわけにはいかねえんだあ
!!!!!!

×月×日

戦闘訓練五百日目 組み手

勝率が八割まで下がってきた。俺ももっと強くなりてーよ。

×月×日

戦闘訓練六百日目 組み手

×月×日

戦闘訓練八百日目 組み手

×月×日
明日、外に出る。

捨て子日記 p. 2

×月×日

天候は晴れ。人生の門出に相応しい天気

今までこんなクソみたいな街早く出て行って金持ちになることを夢見てたけど、いざ外に出るとなると自分がこのゴミだまりに愛着を持っていたことに気付いた。

何だかんだ地元として受け入れてたらしい。

たまには帰ってくるか……。

×月×日

昨日エモいこと書いたのに流星街は抜け出せてない。思ってた以上ここは広がった

×月×日

流星街を抜け出した。抜け出した先には森が広がってた。

流星街とかいう掃き溜めを見過ぎたせいかな森を視界に入れただけで涙出そうになった。特に川と湖！ありやあやべーですよ。綺麗な水があんのに守らなくていいのかよッ!?ってシズクと二人でバカ騒いだけど、そーいや外の世界はこれが普通だって事を思い出して改めて流星街って終わってんだなってことを再確認した日だった。

それにしても、水気持ち良すぎる。

久しぶりにというか今世で初めて水の中に入って体洗った。…けど、気持ち良すぎてシズクと二人で一日中ずっと水遊びして過ごした。

今日は、まともに進まなかったけどこうやって楽しい日常送るのも悪くない。

あと、焼き魚うまかった。

シズクも美味しいって言ってたし今度は寿司を食べさせてやりた

いな。

×月×日

果物・鳥・水すべてがうまい！

汚れが一切ない！……は、嘘だけど流星街と比べればすべてが新品
というか輝いて見える。

……マジで最高かよ。

×月×日

マジで食うもんすべてがうめえや

時間たったら流星街に戻る？フツ、御冗談をwww

故郷とは言えあんな場所にまた戻りてえとは思わねえなあ！！！！

まったくツ！これっぽっちもよお！！！！

×月×日

シズクが俺の寝てる間に日記を見た。

昨日の日記を見て流星街に帰らないの？と心配して聞いてきた。
さすがに冗談だと返しておいたけど……いや、うん、か、かえるよ？

で、でもさ、当分はやめとこや……。

×月×日

木の実すらウメー！！！！

こんなの食べ物のお宝ですよん。何を喰ってもうまいですよん。
マジで流星街に生まれない方がよかつたじゃん。何が「流星街だと拾
えるもんには困らないから大丈夫」「住めば都」だよ！住んで地獄だつ
たわあなんとこッ！

俺はただの敗北者でした！！！！強がってすみませんでしたッ！

水浴びサイコー！

×月×日

森は木の葉にて最強。

×月×日

久々の戦闘訓練。

最近怠けてたし良い意味で気が引き締まった。

×月×日

動物、木の実、水、果物、そのすべてが最強。

×月×日

流星街にいた頃から思ってたけど、まじでこの世界の生物って変だよな。

異様に凶体がデカかったり無駄に眼が多かったり腕が二股に分かれたり奇形すぎでしょ。

×月×日

デカイクマと闘った。

外の世界での初戦。思ってた以上に弱かった。たぶん流星街にいる猫の方が強い。

毛皮あつたけえー。

×月×日

今日は焼き魚。

×月×日

久しぶりの作戦会議。議題：これからどする？に

そろそろ街に着いてもおかしくないってことで、その前に一度話し合っておく事にした。

第一目標 ハンター試験

まず、情報集めをしてハンター試験会場を探す。昔あんちゃんの言ってた話によると、情報収集するのも試験らしく、一応「案内人」と呼ばれる試験官的な奴らが随所にいるらしい。だからそこまで難しくはないとは言ってたけど詳しいことは知らん。

とりあえず町の情報屋を当たってみることにする。

第二目標 金策

流星街である程度のお金は集めたけど足りない可能性も十分ある。足りなかった時にどうするかを話し合ったけど、真面目にバイトで稼ぐことにした。シズクは、盗めばいいじゃんと言ってたけどハンター試験とかいう公務員試験を受けに行くのにその前で犯罪したらヤバすぎだろ。

流星街だったら大丈夫だろうけど、外ではな……。それにもしかしたらハンター試験の監視員に途中でバレる危険性もあるし何よりも危ない橋を渡る必要のない問題だから社会勉強も兼ねてバイトすることになった。

まあ、金が足りなくなったらだけど。

第三目標 うまい飯屋

これは外せない。絶対行く。

×月×日

街到着。

どうやら俺たちは自分たちが思っていた以上に臭かったらしい。宿に泊まろうとしたら体を洗ってから来てくれと言われた。ふざけ

んなーと文句の一つでも行つてやろうかと思つたけど、宿のばあちやんが風呂屋を紹介してくれた。その話によると、近くに流星街出身者がやっている風呂屋があるらしく地図の乗ったチラシをくれた。

地図の通りに進むと流星街出身者初回無料サービスの旗を立てた結構年季の入った風呂屋があつた。

中に入つてみるとじーさんが座っており、俺たちを見て一瞬で気付いたのか風呂は初回無料だから早く入つて来いと怒鳴られた。風呂場はドラム缶式だった。この世界の石鹸は余程凄いのか一回入つただけで臭いが全部消えてた。

この世界に来てからマジで感じるけど、割とファンタジーな世界観してるよな。まあ、今のところ変なカラスとか狼とか変な化け物とかしか見てないから分かんけど、普通に魔法とかありそう。

風呂に入ったあとは、来た道戻つて宿屋に泊まつた。暖かい布団で寝るのは最高すわ。

×月×日

朝起きてすぐに風呂屋に行つた。フロキモチスギー。

じーさんに情報屋について知ってるか聞くと、今いる街から北の方に進むとあるウカドという街に知り合いがいるらしく紹介してくれることになつた。ついでに、この街での美味しい飯屋を聞くと宿屋のある通りの奥にある焼き鳥屋を教えてください。めちやくちや親切すぎてワンチャン試験官説あるなと疑つてたら、普通に一般人だった。何でも、俺らと同じ流星街出身者らしく毎回流星街から出てきたニュービーに風呂を奢つてる優しいじーさんだった。

じーさん長生きしろよ。あと『焼き鳥屋くしぞう』は、確かに美味かつた。

×月×日

じーさんから紹介文を貰つたあと、すぐに街を出てウカドを目指した。じーさんの話によるとウカドまで歩いて二日らしいので訓練も兼ねて街まで走つて行くことにした。

陽が沈むころには街も見え、宿の確保まで出来た。飯は宿のマカス
コガルメ牛の焼肉定食。まじうまい

×月×日

情報屋つてすげー。

じーさんが言つてた場所まで行き、そこにいたねーちゃんに紹介文
を渡した。数分待つと体のがっしりしたマッチョメンがやってきた。
名前はズーマックという俺らと同じ流星街出身者だった。

ハンター試験について聞いてみると一次試験の場所を対価なしに
教えてくれた。ズーマックさんつて試験官なのかと驚いていると、実
はハンター試験の一次試験会場は裏の情報サイトで安値で売られて
いるらしくそこまで苦労しないと教えてくれた。

あと、美味しい飯屋についても聞いてみると街の中央にあるガフアラ
ン公園を東入り口から出た先にある紫通りの蕎麦屋を教えてくれた。
前世ぶりに蕎麦食ったけどマジでうまい。

×月×日

一次試験のためにヨルビアン大陸の北東にあるスヴァンカジャに
行くことになった。スヴァンカジャまでは、一通の飛行船があつか
ら、それに乗っていくことにした。大体5日くらい掛かるらしく飛行
船に乗る前はかなり準備が必要とのこと。

色々大変な旅になるから準備をすぐする事にしたけど、その前にも
う一度蕎麦を食いに行つた。

捨て子日記 p. 3

×月×日

スヴァンカジャ到着。

スヴァンカジャまでの空の旅はかなり快適だった。初めてあそこまで体を動かさない日々を過ごしたけど、トランプ・チェス・映画と飽きのない生活を送れた。

明日からは一次試験。絶対に合格してやりやあ！

×月×日

前回の日記から数日経った。まだハンター試験は終わってない。今は、二次試験が終わって三次試験に入るまでの休憩時間。

『一次試験 受験生十人討伐』

めちやくちや簡単。流星街で生きてきた俺らにとって他の奴らなんてカラスよりも弱いただの雑魚でした。本当にこんなに弱くていいんか？と思うくらいの人たちで溢れてた。この試験で大体600人とか小学校一つ分くらいには人数減ってたと思う。

『二次試験 追走』

走る試験官の後ろを追いかける試験。三回くらい夜空見たから7時間以上は走ってたと思う。走った場所はスヴァンカジャを囲んでいるスース大森林と呼ばれる森。試験官がずっと走り続けて、休憩なし、襲ってくる動物も多めと一次試験と比べて段違いに難しかった。

難しかったけど、それでも基本的に襲ってくる動物が流星街の犬レベルばっかでそこまで苦労はしなかった。

今日で50人くらいまで減ったから三次試験で一桁になりそう寝る

×月×日

三次試験一日目

現在、俺一人。今は木の上に登って体を休めてる。この世界に転生してからすぐ以来の一人の夜。正直かなり寂しい。シズクと10年近く家族として一緒過ごしてたから、初めての一人旅でソワソワするみたいな感覚を味わってる。

『三次試験 サバイバル』

受験生に対してランダムに配られた紙を5枚集めることで完成する地図。それを一人で完成させ、地図で指定された場所へと移動するという普通の感覚だと難しめの試験。ただ、流星街で育った俺にとってはお茶の子さいさいゆっくり森を楽しみながら時間ギリギリにでも行くか……と、思ってたけど、どうやら制限時間が何時間なのかは公開しないスタイルらしく、合格したいなら出来るだけはよこいやと言ふことらしい。試験範囲は、スース大森林を抜けた後にあるスース山脈一帯となっている。

因みに今の収集状況は2/5。6人討伐

入手済みの紙が4回連続で来た時はマジでムカついたけど、とりあえずは順調って感じだな。これなら明日の昼食時までには合格できる。

×月×日

祝 三次試験合格生一号！

三次試験二日目 7人討伐 5/5達成

昼時にはすべての紙を集めて目的地に着くことが出来た。目的地は、二次試験の最終地点であるスース大森林の出口だった。そこには、二次試験終了時には気付かなかった旅館が一つ建っており中々ゆっくりと休むことが出来た。中では、女将さんが玄関で待つっており、そこからは奥へと案内され受験生が集まるまで待機となった。

夕方にはシズクも試験を合格して無事合流出来た。夜には二人で旅館の絶品料理を楽しんで数日ぶりに二人でゆっくり過ごした。現在旅館にはハンター試験の手伝いとして美食ハンターが来ているらしく、夕食は美食ハンターが作った料理を食べることが出来た。

うますぎてしぬかとおもいましたまる

×月×日

三次試験三日目

昨日寝てから受験生が4人しか来ていない。制限時間があとどれくらいかによるけど、三次試験の合格生は6人になりそう。

美食ハンターは神様。

×月×日

三次試験四日目

今日も昨日に引き続き待機時間だった。

旅館の中でただ待っただけで暇で死にそうだったけど、シズクと二人でゲームすることで何とか意識を保つことが出来た。だらーと時間を潰していると俺らと同じ合格者が一人話しかけてきた。

名前はメンチ。俺達よりも三つ上だった。

どうやら一次試験の頃から同年代という事で話しかけようとタイミングを計ってたらしい。最初は、いきなり入ってきてマシニングトークを展開してくっから変な奴に絡まれたと思ってたけど、メンチは俺達と同志だった。

『美食ハンターは神様』という俺達と同じ考えを持った同志だったのだ。

メンチがハンターになろうと思ったのは、小さい頃に二ツ星美食ハンターの料理を食べたからだという。食べた料理は、なんと『寿司』。一口食べただけで昇天しそうになるほど美味しかったらしい。その味が忘れられずに小さい頃から修行を重ね、ハンター試験を受けるに至ったと……。

俺達にも美食ハンターにならないか？との勧誘を受けたが、料理をしたことが無いから断った。けど、さすがのマシニングトークスキル持ち。そんなの関係ねえと言わんばかりにいきなり美食ハンターについて語りだした。

それによると美食ハンターは料理を作れない奴でもなれるらしい。

美食ハンターのタイプ。

- ①自分で食材を取って、料理もする自己完結万能タイプ
 - ②調理は出来るが、食材は他のハンターに依頼する調理特化タイプ
 - ③自分で食材を取って、調理は他の人に依頼する調達特化タイプ
- 現在の美食ハンターの割合は、①が7割、②と③を合わせて3割といった具合で分かれており、②と③の美食ハンターは基本的にタッグとして組むのが多いらしい。

食材調達だけでイイの？

調理は他に任せても……大丈夫？

……。

オラ、美食ハンターなっぞ!!!

×月×日

三次試験終了

合格者は、結局6人だった。

午後には、飛行船に乗りハンター協会へと移動することになった。その時にハンター協会にて現在会長を務めているネテロ会長が来た。た。

なんか演説をしてたけど、とりあえず凄い人だったのは分かった。流星街に偶にいる独特な雰囲気を持った奴らと似た感じがあったけど、格が違う。流星街の奴らと圧倒的に違うのは、勝てるイメージが湧かないところだな。ああいった雰囲気を持った奴らは、何処かに慢心というか油断しているような所があって、ソコを上手く突ければワンチャン勝てるってのが流星街奴ら。

それがネテロ会長には無い。たぶん人間じゃないと思う。まあ、それ以上に優しい人っぽいから何の心配もねーけどな

×月×日

ネテロ会長による面接。色々聞かれた。

なぜハンター試験を受けたのか？ 誰と仲が良いのか？ 何のハンターになりたいのか？ 等根掘り葉掘り聞かれました。その時に逆にどうやったら強くなれるのかを聴くと「継続することと自分を信じる事じやな」と言われた。

なんか漫画に出てくる実は才能だけじゃなくて基礎からずっと継続して鍛えてきた漫画最強キャラクターみたいなこと言ってるめちやくちやカツコ良かったです。

あんなかつけえじーさんになりたい

×月×日

『 最終試験 1対1真剣勝負 』

一回しか出来ない1対1の真剣勝負。ルールは特にない。勝てば良いだけ

一回戦 メンチVSブハラ 勝者 メンチ

一番見ごたえがあった闘い。スピードVSパワーみたいな闘いで、それぞれがどうやって自分の土俵に相手を持ってこさせるかみたいな心理戦的動きがあって見ていて面白かった。

二回戦 シズクVSバショウ 勝者 シズク

シズクのワンパンKO

三回戦 おれVSガシタ 勝者 おれ

ワンパンKO

最後の試験が一番楽しかった。今までの苦労は何だったんだ……。

×月×日

メンチがハンター試験合格を祝って料理を振舞ってくれた。

試験中にあんなに煩かった奴も料理の時には黙ってたのはめっちゃ面白かった。シズクにそれを言ったら聞こえてたらしく顔面へこまされた。

さすが美食ハンターを目指しているだけのことはあると言わざるを得ない料理だった。悔しいけど死ぬほど美味かった。シズクがめ

ちやくちや気に入ってた。多分、美食ハンターよりも美味しい。特に寿司に関しては前世でも食べたことのないくらい美味かった。

三人でバカ騒ぎした後、メンチから結局何のハンターになるのかを真剣に聞かれた。

俺はその質問に答えられなかった。この前は、その場のノリで美食ハンターなるうとか言ったけど、改めて美食ハンターになるかと言われたら「うん」とは言えなかった。今まで美食ハンターになるために努力してきたメンチを見ると、軽く美食ハンターになるとは言えなかった。

メンチはそんな俺達を見て「自分が何を狩りたいのか、何が欲しいのかをゆっくり考えてみなよ。あんた達まだガキなんだから時間はあるわよ」と言って笑って話を流してくれた。

自分が何を狩りたいのか、何を欲しいのか思いつかない。

流星街では、その日を生きたために頑張るのであつて目的なんて他にいらなかった。だからこそ、ハンターになつたらどうすれば良いのかと言われても分からない。真剣に頑張っているプロの世界に自分達みたいな不真面目な奴らが入っていくというのが今更恥ずかしくなつてきた。

×月×日

流星街で目が覚めたとき、地獄にいると思つた。

前世で死ぬ思いをしたのに目が覚めたら更なる苦痛を味わわされる。「ふざけんな」とか「クソがッ!」とか言つてた記憶がある。あの頃は、日々の生活が命懸けで初めの頃は隠れながら所々に落ちている死体を食べて一日を過ごしてた。

そんな地獄で少し生活していると、俺と同じくらいのチビが、俺と同じように死んだ目をして、俺の隣で俺と同じように腐った死体を齧ろうとしてるのが目に入った。

この地獄の中じゃ何処にでもあるような、そんな光景が此処で生まれて初めて歪に見えた。

俺はそんな生活が心底嫌いで絶対金持ちになつてシズクに贅沢させられるようにするつて頑張ってきた。だから、自分が心の底から欲しいものなんて無い。あのクソ街はそんな希望を抱かせてくれなかった。

ただ、シズクが居ればそれで良い。

×月×日

昨日は、めちやくちや憂鬱な気分だったwww

日記を読み返してたけど精神が流星街初期くらいにまでなつてたわ。クソウケるwwwwww

まあ、ふざけて書いたけど、今日の朝にシズクと二人で真剣に話した。

シズクには本音で話した。毎回付き合わせてたけど俺は今後ハンターとしてどうして行きたいのか分からないと。とりあえずやってみるか感覚というか、ハンターになれば将来安泰だから程度にしか考えてなかったから次どうするか思いつかないと話した。

シズクも俺と同じで何をしたら良いのか分からないと言っていたが、「それでも付いていくよ」と言ってくれた。

正直、考えても分からないのでやりたいことを探す旅に出ることにした。

新人ハンター日記

×月×日

メンチに旅に出ることを伝えた。
メンチは、驚かなかつた。どうやらシズクが昨日の夜に伝えてたらしい。

俺が思っている以上にシズクとメンチの仲が良くなっていて嬉しかった。

シズクにとっては初めての同年代の友達。流星街に居たら一生出来なかつた安心して笑いあえる関係、話し合える関係。

これだけでも外に出た甲斐があるな。

旅に出る前にメンチに連れられてシズクと俺の分の携帯を買いに行った。別れる時には、ホームコードを交換して年に一度は同窓会をすることを約束した。

×月×日

やりたいことを探す旅と言っても何をすればいいんだ……？

俺達はその問題にいきなりぶち当たつた。

何をすればそんな無形の存在を見つけることが出来るのか？俺達は悩んだ、めちやくちやに悩んだ。とにかく悩んで、ある事に気が付いた。

俺達には経験が足りないという事にツ!!!!

特にシズクなんて俺みたいに前世の記憶もないという本当にまっさらな状態。今まで流星街で血生臭い生活ばかりを送っていて、普通の人を経験できるような普通の思い出が俺達には何一つ無い。外の世界に来てやった普通の事と言えば美味しい飯を食うことくらい。

つまり俺達にはその他の一般的な経験が圧倒的足りてない!!!!

という事で、世界観光することにしました！難しいことは考えず遊んで暮らします！

×月×日

旅の最初の目的地は、ジャポン。

これは、流星街に居た頃から何回も一緒に行こうと話した場所。軽い思い出の場所みたいなやつ。これに関しては割と最初の方で行くことが決まった。

何よりも本場の『寿司』を食べたい。

メンチがこの前二ツ星ハンターの『寿司』を俺たちに語ったときのアノ顔。本当にこの世とは思えないような料理を食べたのだと一瞬で分かる。あれを見たら食いたいと思ってしまった。そんな魔力がああ顔あの話にはあった。

何よりもシズクの圧が凄い。

×月×日

飛行船一日目

ハンターライセンスやベーよ。マジでジャポンまでの飛行船が無料なんだが？無料なのに案内役が配置されて、飛行船内で受けられる待遇も超VIP用と全てにおいて特別待遇。これにはさすがの私もニツコリですよ。

みなさんハンターおすすすめですよ。

×月×日

飛行船二日目

富豪の生活してます。マッサージ最高。全身とろけるかと思いましたが。

×月×日

飛行船三日目

飛行船で生活したい。そう思っちゃうほど贅沢な日々を過ごします。前世から通して今まで一度も経験したことのない豪遊。ほんとハンターライセンス様様でっせ！がッはははハハハハッ！でも、

明日にはジャポン。

……マジで飛行船に乗る生活しようかな。

×月×日

ジャポ——ン!!!!

サムライ!!!! ニンジャ! サシミ!

SUSHI

!!!!!!

×月×日

KATANA! SUMOU! SOBA!

SUSHI

!!!!!!

×月×日

SUSHI

!!!!!!

×月×日

SUSHI

!!!!

×月×日

ONSEN MAZIDE SAIKOU!

×月×日

SOBA! SOBA! UMAI!

×月×日

お金が無くなった……。

×月×日

毎日、散財してたらお金が無くなった。

思えば飛行船に行ってから俺達は変わった。アレのせいで俺達は金持ちなんだと、俺達は富豪なんだと、夢を見ちまった。

お金が無くなってからようやく目が覚めたよ。

確かにハンター試験を合格して、正式なプロハンターになり色々な権力が増えたけど、俺達自体は何の依頼もこなせてない。何一つとしてハントしてない。何も成せてない。

俺達は、ただのクソザコハンターだった。

×月×日

今日からお金のためにハンター活動をすることにした。

どの分野のハンター依頼を受けるかは、かなり念入りに話した。まず、ハンター協会で斡旋されている依頼を一通り見た。ハンター協会に現在出されている依頼では、新人の俺達が簡単に受けられるレベルのまともな依頼がほぼ無かった。唯一出来そうだったのが、著名人の護衛と宝石護送船の護衛と新人に優しくない世界。

どれを受けるのか迷う。

新人ハンター日記 p. 2

×月×日

結局受ける依頼は、宝石護送船の護衛になった。
やっぱり初めてのハンター依頼という事で、比較的簡単かつ安全そうな依頼をする事にした。

正式に依頼の方をハンター協会へと出したところ断られました。

君達にはその資格が無いと一蹴され、電話を切られた。何回電話してもまともに取り合ってもらえ無かった。もしかして俺達がハンター試験に合格してから金の無駄遣いをして遊び惚けていることがバレて資格失効になったかと思ひ、ハンター協会の方にメールとか送りまくったけど問題は無かった。資格に関しては何も問題は無かったけど、依頼を受ける問題は解決しなかった。

ハンター協会さんは、何の説明もなく私達から仕事を奪いました。これは許されることではありません。流星街に来てから怒ったことなかったけど……怒りますよ？本当の本当に怒りますよ？私達、流星街出身者ですよ？犯罪に躊躇いませんよ？

……私達、本気ですよ？

×月×日

ここ五日間、日記を書く暇が無かった。今日は、修行がひと段落着いたから早めに終わった。

一日目 一人の女が来た。

身長はシズクと同じくらい。ただ、纏う雰囲気はネテロ会長と同レベルという見た目と中身がちぐはぐな女。そんな奴が早朝、俺達の泊っているホテルにいきなり殴りこんで来て俺達に「裏ハンター試験を始めるわよ！」と言ったのが始まりだった。

ソイツが言うには俺達が合格したハンター試験は、ハンターライセンスを貰うための試験であって、合格しただけではプロハンターとは言えないらしく。俺達がこの前依頼を受けられなかったのもソレが

理由だった。そして、プロハンターになるためには、裏ハンター試験と呼ばれるハンター試験よりも何十倍も過酷な試験に合格しないとイケないらしい。それを今回はホテルに来た女が試験官として行うという事だった。

女の名前は、ビスケット・クルーガー。年齢は52歳という化物ババア。裏ハンター試験の中で教わる『念』という技術によって見た目が年を取っていないらしい。

そして、軽く自己紹介したあと早速一日目の本題『念』の解説に入った。

『念』とは、身体から溢れ出すオーラと呼ばれる生命エネルギーを自在に操る能力のこと。

プロハンターが関わる世界では、その『念』が使えることが最低条件の世界だという。

オーラはどんな生き物からも流れ出てはいるが、基本的には操ることが出来ない。なんでも普通の人は、精孔と呼ばれるオーラの溢れ出る穴が開いていない状態であると同時に開いていない精孔から流れ出るオーラが微弱という事もあってオーラを感じる事が出来ないのが普通だと言ってた。

そして、この精孔を開けるには禅や瞑想をする中で自分自身でオーラの流れを感じるところから始まる。

と言う訳で、一日目はただ瞑想をしていた。

休む時間は、飯の時間以外に無く常に瞑想の状態を解かずにオーラを感じ取る訓練をする。たまにババアが念の圧力をかけて、オーラ感覚の確認を行う。それを一日に何十時間と続けて眠りにつく。この生活を五日間続けた。

三日目にはオーラを感じる事が出来た。そこからは、自分のオーラが流れ出ている元を探して、少しずつ精孔から流れ出る量が増えるように穴を広げていく作業。

そして、五日目。遂に精孔を全部開ける事が出来た。

自分の身体の周りを纏っているオーラがハッキリと見える。ババアが言っていたように俺もシズクもオーラが垂れ流しの状態だった。

逆にババアの方は、信じられないくらい洗練されたオーラが一切波打つことなく綺麗に全身を流れていた。

プロハンターやベーヤ。

×月×日

今日は、本格的な念の訓練に入った。

まず最初に、自分の体から流れ出ているオーラを身体に溜めるように纏う『纏』

自分の体から流れ出ているオーラを血液のように全身に張り巡らせるのがコツ。『纏』には、身体の防御力を上げる効果と若さを保つ効果がある。ババアは、この若さを保つ効果が異様に高いらしい。なぜ高いのかは自分でも分からないとかいうチート。

纏は、形にするだけなら楽勝。

でも、ババアのように洗練された状態を保つのは無理。自分の体の周りを淀みなく流させるって言うのは、かなり、かなり、かなり集中すれば今の俺でも出来る。けど、それを意識することなくかつ流れ出るオーラは必要最低限って言うレベルでやるのは無理。本当に自分のオーラを手足のように扱えないとあのレベルには行けない。それくらいあの人は凄い。

次に習ったのは『絶』。

オーラが流れ出す元である精孔を閉じることで完全に気配を絶つ技法。『絶』には、気配を絶つ効果と疲労回復の効果がある。

絶に関しては、前から出来ていたことが判明した。流星街で化物や動物を殺すために毎回やっていた気配を断つという癖が、絶だった。まんま絶やった。俺達のやっていたあの生活は無駄じゃなかったらしい。

そして最後に習ったのは『練』。

精孔を広げた後に体内にエネルギーを溜めるイメージで全身の細胞全てからパワーを集め、集めたオーラを一気に開放することで通常

時よりもオーラを引き出す技法。『練』によって練ったオーラは、『纏』で留めることで引き出したオーラを満遍なく扱うことが出来る。

明日からは、『纏』↓『絶』↓『練』の流れを毎日5時間以上は修行することになった。

×月×日

ババアが頭を抱えてた。

なんでも俺達が昨日教えてもらった『纏』・『絶』・『練』は、本当なら一年以上かけて形にしていくモノであって、一日使って出来るような技術では無かったらしい。俺達の技術自体は、ペーパーもペーパーで念を覚え始めた初心者レベルある事には間違いないがソレは一年近くかけた者でも同じ。この異様な念の才能はいくら両親に感謝の言葉を送っても足りないレベルらしい。

まあ、俺らに両親いねーけどな(笑)

とりあえず、『纏』↓『絶』↓『練』の流れを10時間近く反復したが今日はそれだけで終わった。ババアは、明日からの修行の内容を考える必要があるらしく、今日は一日自由時間になった。

久しぶりに一緒に狩りをした。イノシシウメー。

×月×日

今日は、『発』を習った。

『発』とは、念の技術における最終到達点の一つであり、本当の意味でオーラを自在に操る技術の事である。オーラには、強化系・放出系・操作系・特質系・具現化系・変化系の六つの属性が存在している。誰もが生まれつきこの属性のどれかに属しており、その属性にあったオーラの性質を持っている。

『発』では、その自分の性質を理解したうえで自分の念能力を考え

る。

自分のオーラがどの系統に属しているのかは水見式によって確認する。コップに溜まった水に手をかざして錬を行う。ソレだけで系統が分かる。便利すぎだろ。

結果は、俺が強化系。シズクが具現化系だった。

ババアによると、本当は『発』の修行は3か月後を予定していたと言う。それを今回前倒してやったのは、今後の修行日程を組むのに必要だったかららしい。今日から行う『発』の修行では、具体的な能力を作ることはせず、自身の性質を強化していく方向での鍛錬をするこ
とになった。

そして、これから3か月は『纏』↓『練』↓『発』の鍛錬を中心にやることになった。

なんかババアが俺達を置いて一人でめちやくちや盛り上がった。た。「原石がどーのこーの」言ってテンション上がりまくってた。俺達がそれを冷めた目で見てたら、申し訳なきような顔で謝ってきたから俺が「ババア、いい歳して恥ずかしくねーの？」って言ったら夜になってた。

×月×日

念の修行がめちやくちや楽しい。

前世では存在しなかった魔法のような力を自分で操るとか。死ぬ前にやってたどのゲームよりも面白い。しかも、普通よりも才能があるおかげで、修行した分が眼に見えて成長する。そのおかげでモチベーションが落ちることも無い。

それに加えて、一緒に切磋琢磨出来る家族がいて、めちやくちや褒めてくれるババアもいる。ふむ、こりゃあ最高の環境ですね。ただ、偶にババアがませたガキみたいなこと言いだすのはムカつく。そのたびに年増とかって言っただけ煽るけど、決まって夜になる。

……纏と練の修行頑張ろう。

×月×日

練で練った大量のオーラを纏で綺麗に纏うのが難しい。

いつもの量だったら簡単に纏えるけど、やっぱり少しでもオーラが増えるとソレだけで難易度が何段階も上がる。ただ、少しずつではあるがオーラの制御ができるようになってる。

×月×日

ババアが練から纏の工程はいきなりやるものじゃないって言った。

それよりもまずは、練の鍛錬を一点集中で行い、自分の中から溢れ出る大量のオーラに体の感覚を慣らせてから練↓纏の鍛錬をすれば上手く制御できるようになるらしい。

俺が昨日までやってた鍛錬は、普通自動車にスポーツカーのエンジンを積んで動かないと言っているような状態とか言ってた。

×月×日

あれから何日も他の修行以上に練の鍛錬をした。

鍛錬の中で凄いことに気付いたが、練で練られるオーラ量が少しずつだが上がってる。それと同時に纏で纏える量も少しずつ増えてる。

×月×日

今日は、あれから全然してなかった練↓纏の鍛錬をした。結果はババアの言ってたことは正しかった。

この前までめちゃくちゃ苦戦してた大量のオーラの制御が完璧に出来た。俺が完全に制御している時にババアが俺達の方へ来て、二つ応用技を教えてくれることになった

一つ目は『隠』。

『隠』とは、絶を応用した高等技術。自分の持つオーラを限りなく見えなくさせることが出来る。この『隠』に対抗する方法は一つしかない

い。ソレが次に習った『凝』。

『凝』とは、身体の一部にオーラを集中させることで、部分的に強化を掛ける技術。オーラを集中させる部分を眼にすれば、『隠』を見破ることが出来る。ただ『隠』を見破るためには、練によって練った大量のオーラを眼に集中させる必要がある。

明日からは、『凝』の訓練を抜き打ちでやる事になった。

ババアが罰ゲームを付けると言ったときは、性格が悪いから意地悪でやってんのかと思ったら俺達にヤル気を起こさせるために設定したとか抜かしてた。

×月×日

凝の抜き打ちテストが難しい。

ババアが指を立てた時や腕を伸ばした時、不自然な眼の動きをした時とかマジで日常の中で仕掛けてくんのがヤバイ。でも、念能力者同士の闘いにおいては、そういった動作や目の動きから念を飛ばしたりしてくるらしい。ババアが「少しでも違和感を覚えたら凝！戦闘の基本だわさ」としつこく言う理由は分かる。

気付かない間に首元にナイフ突き付けられてるとかマジで怖すぎるからな。

×月×日

今日は、発の鍛錬をメインでやった。

水見式を何回もやる中で気付いたが、練だけじゃなくて水に向かって凝をすると信じられない速度で水が増える。俺が思っている以上に凝による強化倍率が高いことを知った瞬間だった。

一回だけ凝で強化した拳で岩を殴ったが爆散した。

×月×日

今日は、念を使って狩りをした。

なぜ念を使つての狩りをしたかと言うと、手加減の練習をするためだったらしい。正直言つて何の問題も無かった。今まで通りの感覚

でやって、いつも通りの狩りをした。

×月×日

念を習い始めてから今日で3か月。

明日から応用技に関する本格的な修行が始まる。今日までは念における基礎固めをやってきたが初日と比べて段違いに技術が上がった。特に練↓纏の流れや凝は完璧に習得した。それでもまだまだ成長しきっていない感じがする。

マジで明日からの修行が楽しみだ。

新人ハンター日記 p. 3

×月×日

今日は四五行の応用技の本格的な修行に入った。

修行の内容は、岩石地帯でひたすら穴を掘る作業。本当にこれで行になるのかと最初はババアを疑ったが、その認識も陽が落ちるころには変わった。この穴を掘る作業、実はめちやくちや疲れる。穴を掘るのに腕の力だけでなく、下半身の腰回りと足と身体全体を使う必要がある。

纏の状態で掘り進めて言っても200・300m程しか進まない。正直、念を習っていないかったら一日で100m程度しか進めないと思う。それくらいヤバイ。

そして、今日から夜も修行になった。寝る時は、座った姿勢で岩を付けたロープを持った状態で眠る。そして、寝ている時にそのロープが切られた時は即座に避けるといった修行。まあ、この程度は流星街における日常と変わらないレベルで何の問題も無かったが、それを霧囲気から感じ取ったババアがロープじゃなくて身体に投げるようになった。

うぜえ。

×月×日

今日も穴掘り作業。

今日は、穴掘りの作業中に『周』に関する詳しい説明を受けた。

『周』とは、物体にオーラを纏わせることで、その物体が持っている性質を強化する技法。例えば、剣に周をすれば切る力が強化され、盾なら防御力が増す、そして今俺達が使っているシヤベルに周をかければ掘る力が強化されると言うめちやくちやに便利な技。

ただ『周』は、前に習った『凝』や『隠』とは違って桁違いに体力と気力が持つていかれる。それを抑える為にも、周で纏わせる量は極力節約して必要最低限のオーラでシヤベルの強化をする。言葉では簡単だけど実行は四五行よりも圧倒的に難しい。

自分の持っているシャベルを身体の一部だと思って、オーラを纏わせるのがコツ。

×月×日

穴掘り作業。

少しずつだが着実に掘れる量が増えている。周の方は、まだまだ粗削りで実戦では使えないレベル。一回だけババアの周を見せてもらったが、イカレテタ。マジでババアの底が見えない。顔色一つ変えることなく綺麗に纏わせた。何よりも恐ろしいのがその展開速度。本当に一瞬で、ON/OFFの切り替えをした。

×月×日

穴掘り作業。

今日もババアの周を見せてもらった。ババアにこれは年を重ねてきたから出来てるのであってあんた達みたいなのは無理だからあんま落ち込むんじゃないと言われた。あの年増、心配している風の声をかけながらも顔はしっかりと煽ってた。
ムカつく。

×月×日

穴掘り作業。

今日もババアの周を見た。正直言って、ババアの周はかなり勉強になる。自分の感覚で探っていくよりもババアの見本を見ながら一緒に練習した方が何倍も効率が良い。ババアと同じくらいの展開速度は無理でも、そこそこ速くはなった。オーラの纏う量は別として。

×月×日

穴掘り作業。

シズクの周が完璧すぎる。シズクも俺と一緒にババアの動きをマネしていたが、俺よりも覚えが早い。シズクも周を簡単に覚えられたことに自分で驚いていた。それくらいスムーズに出来た。

……負けらんねえ。

×月×日

穴掘り作業最終日。第一段階の修行終わり！

一ヶ月近くやってきた穴掘り作業が今日で終わった。あの後、俺も一日遅れで周がスムーズに出来るようになった。それでも、シズクのようにどんな物でも綺麗に周でオーラを纏わせるような芸当は俺には出来ない。ババアもあの技術はシズクにしかない才能だと言った。

×月×日

今日から組み手による実戦練習が始まった。

実際に組み手を始める前に、『硬』と『堅』、『流』の説明を受けた。『硬』とは、『纏』『絶』『練』『発』『凝』を複合した応用技。『凝』によりオーラを身体の一部へと集中させ、その集中させたオーラを『纏』で留める。次に身体を纏っている微弱なオーラを『絶』で止める。すると、『凝』で集中させている部分に最初よりも多いオーラが集まる。この『凝』↓『纏』↓『絶』↓『凝』の工程が基本的な『硬』の流れ。この工程に『練』や『発』を加えることで、さらに『凝』によるオーラの力は高まる。ただ弱点としてオーラを一点に集中させるため他の部分の守りが薄くなるというデメリットがある。

そして次に、『堅』。『堅』とは、全身を通常よりもはるかに多いオーラで覆い防御する『纏』と『練』の応用技。念能力者同士の闘いにおける戦闘態勢の基本。実は、俺達は三大行の時点でこの鍛錬を行っていた。練↓纏の流れによる基礎固め。あれが実は『堅』の鍛錬になっていた。というか、その工程が『堅』だった。

ただ、『堅』はそれだけでは終わらない。俺達が今までやってきた『堅』は、攻撃力50・防御力50のいわゆる攻防50と呼ばれる『堅』におけるニュートラルな状態。実践の中では、この攻撃力と防御力のオーラを『凝』を使うことで瞬時に状況に合わせた攻撃力・防御力に加減する。それが『堅』における攻防の基礎と言ってた。

そして、そういった攻防力を状況に応じて瞬時に変える技術を『流』
と言うらしい。

今日からその『硬』『堅』『流』の三つを使った組み手を行う。

×月×日

組み手は、シズクと俺の二人で行う。防御側と攻撃側を交互に行
い、その時々で攻防力を変える。基本的には、武術としての組手では
なく、念における攻防力の移動『流』の鍛錬としての組手。

穴掘り作業とはレベルが違い過ぎて気が抜けない。ババアが四大
行の時に言ってた「凝が戦闘の基本」の意味を身を持って体験してる。
そりゃあ堅での攻防戦を考えたら凝の大切さって異常だわ。てか、凝
の応用力が半端ない。隠を見破れるし、硬における基本だし、攻防戦
でオーラ量の見極めで重要だし、と引つ張りだこ過ぎる。

×月×日

攻防力組み手。

なんかめちやくちゃ思い通りにオーラが動く。周の時は自分の体
以外にオーラを纏わせる感覚に手古摺ってたけど、自分の身体の周り
で動かす『流』は、『周』の百倍やりやすい。てか、四大行の鍛錬の時
にやった『堅』の修行が今になって生きてきてる気がする。あの時に
諦めずにやっておいて良かった。

ババアも『流』に関しては誰よりも才能があると言ってた。

ババア……わかつとるやん。うちできるこやでもっとほめてな

×月×日

昨日、ババアに才能があーだこーだ言われてから調子に乗ってババ
アよりもうめーわとか言ったらコテンパンにされた。年の功には勝
てなかった。

×月×日

今日は『硬』の鍛錬をメインに修行した。

『硬』は、強化系の俺にとつてめちやくちやに相性の良い技術だった。ババアも言つてたけど、強化系は硬をして相手を殴るだけで必殺技の『発』レベルになる。ただ、ソレは念能力者にとつては、太陽が東から登つて西に沈むくらい常識だから基本的には当てられないことが多いらしい。

×月×日

今日は、攻防力組み手。

この組み手は、めちやくちや好き。自分の得意分野で勝負できるから調子に乗れる。それでシズクを煽つてたら周で煽られた。

×月×日

今日からババアとの組み手がメインになった。

ババアとの組み手は、流の速度勝負になる。かなり実戦を意識した組み手になつてる。正直言つて、今の俺が唯一ババアに一泡吹かせられる分野だから死ぬほど真面目にやつてる。ただ、ババアも伊達に年齢を重ねているわけではないため、簡単には勝たせてくれない。

でも、少しずつだが近づいてる……気がする。

×月×日

ババアとの攻防力組み手。

やつぱりババアは、決まった動きに対しての流の速さは異常だ。正拳突きや上段受け、下段受け等の武術における型の動きはマジでヤバいレベルだが、少しでも崩れた動きになると流に少しだけラグが出る。それをどう突けるかが重要になつてくるが、ソレはババア自身も気づいてる。その上でババアは、それを修正することなく、組み手におけるフェイントとして活用してくる。そのせいで逆に俺の流が乱れるつていう理不尽。

化物がよー、少しは夢見させてくれや。

×月×日

シズクもババアとの組み手で流のコツを掴んできた。かなりの速度での組み手が出来てる。ババアは、もしシズクが具現化した武器を持ったらそこら辺の強化系なら簡単に倒せるレベルになってるって言った。具現化系として、そのレベルまで行けるのは少数だからマジで凄いつばい。それに加えてまだまだ伸びしろもあるから、具現化系の中では珍しい武闘派路線も全然いけるらしい。

具現化系武闘派 シズク 爆誕!!!

それに対して俺は、強化系として中堅クラスにはなってるらしい。言われたのはそれだけ。なんか俺に対して冷たくねーか？

前々からやたらとシズクの事を猫可愛がりしてるから、そういうもんだと思ってたけど、相対的に俺に対しての態度が冷たくなるのはナシだろ！家族の中で両親から愛情がもらえない方の兄になってるって！

×月×日

今日から攻防力組み手や硬の修行に加えて系統別の修行をやる事になった。系統別の修行では、自分の系統を中心に熟練度が山なりになるように鍛錬していくことになった。何でも他の系統もバランスよく修行することによって自分の系統の覚えが早くなるらしい。

そういうわけで、俺は強化系の修行をシズクは具現化系の修行をした。

「強化系修行レベル1 石割り」

自分の持つ石で別の石を割る修行。1日に1000個割ることが出来ればレベル1合格。この修行では、自分の持つ石に周でオーラを纏わせ、石を割る瞬間に硬で瞬間的な強化を行う。割る石が増えれば増える程、最初にあった集中力や念の制御、身体的疲労が溜まってくる。めちやくちや理にかなった修行だった。

俺：156個

系統別修行は一日一系統が原則。他の修行は日を変えてやることになった。

×月×日

「放出系修行レベル1 球遊び」

球状のオーラを自分の体から切り離し長時間維持する修行。

普通に難しい。系統としては隣にあるおかげか切り離すのまでは簡単にいけたが長時間維持するのがめっちゃ難しくかった。普通に40秒くらいして消える。ただ、それも何回も繰り返していくうちに伸びていく。この放出系の修行は、『纏』の力強さに比例するはずだが、俺の場合はそうだったのは関係なく、単純に自分から離れたオーラの制御が下手くそだと言われた。

×月×日

「変化系修行レベル1 形状変化」

指先のオーラを数字に変える修行。0から9までの数字を1分以内につくればクリア。最終目標は5秒以内らしい。

これは、放出系の時と比べて簡単に出来た。数回やった時点で形状変化を五分以内にまで短縮できた。ババアの話によると、俺は変化系寄りの強化系と呼ばれる部類に入っているらしい。放出系が他の強化系に比べて苦手になる代わりに変化系が得意になるのが特徴。と言っても、習得率が遅くなる程度の違いだという。それ自体も俺達みたいな才能のある人間は、普通の人たちよりも早くなるとか言っていたしあんまり気にしなくても良さそうだった。

×月×日

今日は強化系レベル1の修行。今日の石は673個。

あと一回修行を重ねたらいけると思う。やっぱり自分の得意な系統の習得率はかなり高いことになってるらしい。変化系や放出系と比べてかなりスムーズに進んでる。強化系の修行の後は、攻防力組み手をした。ババアには未だに勝ってない。けど、背中は見えてきてる。

×月×日

放出系レベル1の修行。球遊びはやっぱり難しい。

球を長時間維持するのに精一杯で、その後には岩に飛ばすことが出来ない。ただ、切り離れた状態の球を維持する時間は延びている。今日で3時間まで伸ばすことが出来た。てか、最近気づいたが自分から離れたオーラを制御するときは、自分の体から離れていても自分の体の一部だと思いつくことが大切だわ。少しでも自分の感覚を騙せればいける。

×月×日

変化系レベル1の修行。変化系は本当に楽。

強化系の修行と同じくらいスムーズに進む。

今日で0から9の数字を1分以内で展開できるようになった。実質的に変化系はクリアした。けど、俺は5秒に縮めるまでレベル1の修行を続けることにした。今回はズルをしたというか、ババアに何回か手本を見せてもらった。それで簡単にクリアまで行けたから、ババアはマジで良い教材なんだけど、得意とか言っておいて頼ったのが何か負けた気がするので自分で5秒以内に行けるまでレベル1は止めない。

×月×日

強化系レベル1 合格。

今日で1149個割ることが出来た。ババアの手本を見ずに簡単にここまで来たからやっぱり自系統って凄い。自分でもそこまで苦労することなく来れてる。ただ、次からはガツツリとババアの手本を見て進めていく事にした。やっぱり使えるもんは全部使っておかねーと損した気持ちになるもんよ。

その代わりにババアにもう少し合格条件を難しくするように言っておいた。そしたら、ババアがめっちゃくちゃ良い笑顔でいいわよとか

言ってたけど、アレは絶対何かを企んでた。

×月×日

放出系レベル1

今日は、15時間まで延ばせるようになった。ババアの手本はハンター界にて最強！ マジでねー、手本があると違うのよ。やつぱりねー、自分のフィーリングで物事を進めていくのは危険。教えてくれる、頼れる人がいるなら頼らなきや損！

いやマジでサイコーー！！

苦手科目で100点取ったみたいな気持ちよさがある。

×月×日

シズクが『発』を作った。

×月×日

「具現化系念能力 デメちゃん」
念で具現化した掃除機「デメちゃん」を使ってシズクが念じたモノを何でも吸い込む能力。ただし、シズクが生き物だと認識しているモノは吸い込むことが出来ない。また、最後に吸い込んだモノなら吐き出すことが可能。吸い込まれたモノがどこに行くかはシズク自身も分かってない。

系統別の修行が始まって2か月、シズクは「発」を作った。
ババア曰くここまで完成度が高くかつ高性能な「発」をたった2か月で作れるのは、修行の成果もあるけどそれ以上に才能のゴリ押しらしい。

因みに現在の俺達の系統別修行の進行度は、シズクが具現化系レベル5と変化系レベル4、俺が強化系レベル4と変化系レベル3、放出系レベル2となっている。

シズクは、特質系の才能が無いため修行は具現化系と変化系の二つとなっている。そのおかげで俺と比べて修行の進行度が速い。そういった理由もあってシズクは俺よりも先に「発」の開発を進めていた。ただ、それでもシズクは異常らしい。特にデメちゃんと呼ばれる掃除機。その具現化は、一番異質だとババアが言っていた。

確かに自我を持つてる掃除機をどうやったらイメージ出来るんだ……。

×月×日

シズクになんでその掃除機をイメージ出来たのか聴いたところ、流星街に居た頃にこの掃除機を持っていたかららしい。そう言われたら確かにシズクが小さい頃に動かない掃除機を拾ってきたような思いが無いでもない。ただ、確実に言えるのは拾ってきた掃除機は「ギョギョギョ」とは鳴かなかった。

それに関してはシズクにも分かって無いらしい。気付いたら勝手

に鳴いてたという。

まあ、別に強いから良いけどね、シズクも気に入ってるみたいだし。

×月×日

今日は、放出系のレベル3の修行に入った。

「放出系修行レベル3 早打ち」

レベル2の修行では、オーラで作った球を50メートル先の的まで飛ばしていたが今回はそれを10秒以内で出来るようにする修行。最終目標は、3秒以内。

どんなに頑張っても30秒から短くならない。ババアはこれが出来ないと実戦レベルでは使えないと言っていた。普通の放出系は、この程度の球遊びは1秒も掛からずやる。別に自系統じゃなくても遅くて3秒又は2秒と時間をかけない。だから、最終目標が最低限レベルみたいなどころがある。

ババアは、強化系にとって放出系は「発」を考えるうえで最も相性が良いとか言つて、めちやくちや修行に熱が入ってる。でも、俺は放出系の念能力を作ることを今のところ全く考えてない。それよりも変化系寄りでの念能力を考えてる。イメージも大体固まってる。だから、後は作るだけなんだけど変化系の修行がレベル5に行くまで我慢してる。

「発」に関する詳しいことは二人には何も言っていない。理由としては、いきなり二人の前でめちやくちや完成度の高い「発」を見せて自慢したいから。それ以外特に意味はない。

自分で考えてもちよつと幼稚かと思っただけど、必殺技って相談せずにカツコいい状態で見せたいじゃん。

×月×日

今日から変化系レベル4の修行に入った。

「変化系修行レベル4 長文」

レベル4では、指先のオーラを長文へと変える修行。ルールは、作る長文は毎回変えること。クリア条件は、一分以内で長文を完成させ

ること。

だんだんと変化させる量が増えているが、今回はそこまで難しくは感じない。確かに長文になったことで、一分以内に完成させることは難しくなったが、俺も成長していない訳ではない。ここまでしつかりと修行を重ねてきた時間と経験がある。それに、逆を言えば時間を短くするだけである。毎回の系統修行で反復練習を忘れずにやれば二十日以内には行けそうな気がする。

×月×日

今日は、前回から引き続き強化系レベル4の修行をしている。

「強化系修行レベル4 強化石割り」

自身で強化した石をまた別の強化した石で割る修行。石を割るときは、粉々にならないように理想は半分に分れるようにする。クリア目標は、一日500個。これは、レベル3でやった並行石割りの強化版。この修行の目的は、強化の加減を覚えること。

今日で一日471個まで行けるようになったから次はクリアできると思う。

そして今回、遂にババアに攻防力組み手で一勝出来た。一勝したと言っても一回だけ俺の攻撃力がババアの防御力を僅かに上回って吹っ飛ばすことが出来ただけだけどそれでも勝ち。全身全霊でババアを煽った。

……気付いたら夜になった。

×月×日

放出系レベル3の修行。

今日は、26秒までタイムを縮めることが出来た。今日は、ババアの手本を見せてもらった。何とババアはレベル4までの放出系修行を完璧にこなすことが出来る化物だった。てか、この理論で行くと現在のババアは変化系がレベル8以上、強化系・具現化系がレベル6以上で念を修めることになる。

ババアって念教え始めの時に30年以上修行したから任せなとか

言つてたけど、今考えたらヤバいな。ババアは俺達に才能があーだこーだ言うけど、重ねた歳の前にはそんな関係ないように感じる。

×月×日

前回から引き続き変化系レベル4の修行中

今日は、がつつりお手本を見てた。ババアは文字を書くよりも速いスピードでオーラを変化させる。それに加えて文字が複雑にも拘らずまっすぐな状態で長文を完成させる。完全にオーラの変化を制御してる証拠だ。修行する時は毎回手本を頼んできたから、そのおかげでめちやくちや凝が上達してる。かなり細かい部分までオーラの動きを見分けることが出来るようになってる。

×月×日

強化系レベル4 無事合格。

今日は、スムーズに進んだおかげで他の修行が多めに取れた。いつもは、攻防力組み手を中心に修行してるが、今日から練と堅の維持の修行をメインにやる事になった。ババアの話によると、中堅クラスのプロハンターになると練や堅の維持が3時間以上できないと話にならないという。今の俺とシズクは、1時間30分程しか出来ていないからあと最低2倍、出来れば6倍くらい行けたら最高。

今日から日記は少なめにすることにする。

この修行期間中の集中力が高められるように無駄なことを減らして行きたい。このまま、シズクに独走されるのだけは絶対にイヤだ。

×月×日

今日から強化系レベル5の修行に入った。

「強化系修行レベル5 強化石割り」
レベル4の時とは違い今回はババアが強化した石を割る修行になった。目標はレベル1の石割りと同じ1000個。

レベル4の時は、自分で強化した石を割る並行作業だった。あの時は、確かに手抜きはしなかったけど、それでも辛うじて200個は初日で割れてた。けど、今回は初日で79個。段違いにレベルが上がってる。

×月×日

今日から変化系レベル5の修行に入った。

「変化系修行レベル5 高速長文」
レベル1は数字、レベル2は単語、レベル3は短文、レベル4は長文と来て、レベル5ではそこに速度が必要になった。具体的には5秒以内で長文を作る。ただそれだけ。レベル4ではそこまで速さを求められていなかったおかげで、時間をかければ簡単に合格できるようなものであったが、今回は違う。

レベル5に入ったという事で、早速二人に隠れて「発」を作った。

「変化系・強化系念能力 ブレード」
オーラを刃状の鞭に変形させて対象を攻撃・切断する。最大10メートルほど伸ばせる。その刃は、強化系の性質により極限まで鋭さが増している。

俺は、自分が変化系寄りの強化系と知った時にこの能力を作ろうと思った。理由は、パツと思いついたから。まあ、元々「発」を作るときには強化系らしい単純な能力を作ろうとは思ってた。それが変化系寄りだと知ったときに……俺の頭にある記憶がフラッシュバックした。

——それは前世で見たテレビの内容。

『鞭の先端って実は音速を超えるんですよ!』

『え? そうなんですか!』

『今回はそれを検証していききたいと思いまゝす！それでは検証開始
!!』

そんな何処にでもやってそうなテレビの内容。小さい頃はソレが
衝撃的だった。鞭ってやべーんだ。危ないんだ。凄いなだつて子ど
もながらに記憶に残っている。

その記憶が変化系寄りだと知ったときに溢れ出した。そこからは
すぐだった。じゃあ「発」を作るときにはオーラを鞭みたいのに撓る
ように性質を変え、さらにそこで刃のように鋭くさせたら強くねーか
……そんな単純な思考。

それが最終的に「ブレード」を生んだ。結構短時間で作ったけど俺
は悪くないと思ってる。それにブレードを使いこなせばもつと強く
なれる確信が俺の中にある。

だから、見とけ二人とも。

俺はこの「発」で強くなるぞ。

シズクIIムラサキ

一番古い記憶は、殴られる記憶。

暗い部屋、お父さんの荒い息、すすり泣く私。

それが、シズクIIムラサキのはじまり。

私のお父さんは、酒飲みで毎日流星街を歩き回ってはお酒を拾ってくる生活をしてた。拾えなかった日は、私を殴ることでストレスを発散して、酷い時には私の首を絞めて気絶させるそんな毎日を送ってた。

私はそれが嫌で嫌で仕方なかった。

だから、殺した。

殺してからは自由だった。

でも、私はお父さんがいなくなつてから何も出来なくなった。食べ物や飲み物は、全部お父さんがお酒と一緒に持ってきて、それをお父さんが毎日少しだけ分けてくれた。家に籠るだけのバカな私は、お父さんがいなくなつた後にどうするか考えてなかった。

私は初めて流星街に落ちてる食べ物を探した。

でも、世界はそんなに甘くない。流星街まで来る食べ物なんて大体腐って食べられないか、流星街に住む住民が奪い合う。小さい私にはそんな生存競争は無理だった。

だから、死体を食べた。味は覚えてない。

そうして毎日を無駄に生きてたときに、ケイと会った。

ケイは、初めて会った私に食べ物くれた。最初は、ただ食べ物をくれるから付いていただけだった。何もしなくても食べ物くれるし、新しい家もケイが見つけたし、引きこもっても殴らないしケイと一緒に居たら今まで以上の生活が出来た。

そんな生活をしてたある日、私は大きい犬に襲われた。

私の何十倍もある犬。久しぶりに出た外で私は襲われた。その時

にああで死ぬんだと思った。やつと死ぬるって思った。優しくしてくれるケイも自分の命と引き換えに助けるような人じゃないと思っ
てたから。ケイは優しいけどそれは自分に食べ物や家を分けても余
裕があるから出来ているだけだと……。

でも、ケイは助けてくれた。

自分がボロボロになって全身から血が噴き出しても構わずに私を
犬から助けた。

それからも只のお荷物をケイはずっと傍に置いてくれた。ずっと
守ってくれた。一緒に暮らしていく中で、家族になってくれた。

ハンターになって、ビスケから念を習って私でもケイの力になれる
ことを知った。

今度は、私がケイを守る。群がってくるようなゴミは全部私が掃除
する。

だから、これからも一緒に――。

「――が、私の能力」

私は、自分の「発」であるデメちゃんについてケイに説明する。ケ
イは、私が先に発を作ったのが悔しいのか少ししかめっ面で話を聞い
ていた。

「へー、すげえ念能力っぽい。それにしてもめちやくちや強くないか
？ 戦闘中に相手のオーラを吸えば勝てるじゃん」

「いやー、デメちゃんだと念能力は吸えないんだよねー」

「まあ、それでも普通に強いし便利だな」

「でしょ」

「あ、あ、あ、俺もシズクに負けてらんねーし修行してくるわ
！」

そう言うとケイはいつもの修行場へと走っていく。その後ろ姿を

見ていると、いつの間にか背後にいたビスケが話しかけてきた。どうやら気になる事でもあったのか少し暗い表情で話しかけてくる。

「で、他の能力は？」

少し驚いた。

いつも一緒に居るケイならまだしもビスケが私の嘘に気付くとは思わなかったから。

「え？何が？」

「アンタの念能力。まだ隠してる事があるでしょ？」

「えー、ビスケなんで分かったの？」

「そりゃあ、あたしがどれだけ歳重ねてきてると思ってるんだわさ。それくらい簡単！」

本当なら奥の手については隠しておくべき……だけど、ビスケだったら大丈夫かな。念の師匠だし、優しいし、お母さんだし、ビスケなら知っても秘密を守ってくれそうだし……別に良いよね。

「うーん……まあビスケにならないっか。私のもう一つの念能力は——」

「具現化系念能力 最新式掃除機デメちゃん」

ステイック型掃除機「デメちゃん」を具現化して、念能力を吸い込む能力。ただし念能力を吸い込むためには、デメちゃんの口に直接接触している必要がある。念能力以外のモノを吸い込むことが出来ない。相手の念能力に対しての理解度が高いほど、その吸収速度は上がる。逆に、間違った認識で吸い込んだ場合、吸収にかかる時間は2倍になる。ステイック型デメちゃんを具現化している時は、キャニスター型デメちゃんを具現化することは出来ない。また、キャニスター型デメちゃんでは最後に吸い込んだモノを吐き出すことが出来ていたが、ステイック型デメちゃんにはソレが出来ない。

「なんでケイにこの能力のこと隠したのよ？」

「必殺技は隠してた方がカッコいいってケイが言ってたから」

それにケイは私の嘘に気付いてる。その上でケイは聴かなかった。多分隠している能力が知られたくないことだって一瞬で気付いてくれた。だから、大丈夫。問題なし。

「はあく、
アンタも大概ね」

ビスケットトールクルーガー

切っ掛けはジジイからの電話。

「ビスケ、久しぶりに裏ハンター試験の試験官をやらんか？」

最初は断ろうと思ってた。

ストーンハンターとしての仕事を真剣にやっている時期だったし、今更あたしが試験官をするのも違うような気がしたからね。でも、ジジイは推してきた。

「今年の合格者に二名ほど潜在能力の高そうな子を見つけたから、オヌシに頼みたくてな。正直その二人が何処に堕ちてもおかしくない雰囲気があつてのオ。信頼できる試験官に任せたいんじゃないよ」

「どれくらい高いんだわさ？」

「うむ、十二支んレベル若しくはそれ以上じゃな」

「……は？それ本気？」

「ワシは嘘なんかつかんぞ」

(はあ、どの口が言ってるのよ)

いつも平気で嘘ついてんでしょーがッ！……でも、確かにジジイはこの手の話で嘘はつかない。だとすれば、未だに何にも染まっていない宝石があるってこと。ジジイがアタシに頼むくらいの原石。それをアタシが育てる……。

「うふふふふふふ、良いわねエ〜」

「お、その様子だと受けてくれそうじゃの」

「ええ、良いわよ！今回はジジイの口車に乗せられて上げるんだわさ！」

……ありえない。

たった五日間で精孔を完全に開けるなんて……しかも二人とも。単純に才能があるって言葉で流して良い話じゃない。才能があるって言われたアタシでも2か月は掛かったのに、それをこの短期間で習

得するって……異常だわさ。

十二支ん以上は確定、なんなら育ち方次第ではジジイに触れる事さえ可能なほどの才能。まさに、磨けば磨くほど光る原石。そして、二人ともそれぞれが違った良さを持つてる。

本当にジジイは良い拾い物をしたもんだわさ。

こんな若手を二人も同時期に手に入れるなんて、ハンターとしての『運』は現役ね。

「じゃあ、今日から本格的な念の修行に入るわよ！」

「ブラックだー！休みをくれー！昨日まで五日間ぶっ続けて修行したのに一日の休みももらえないなんて横暴だー」

「そうだそうだー。オウボウだー」

「うるさいわね。昨日は早めに終わったでしょ」

「は？アレだけで休んだって言えるわけねーだろ。ババアボケてんのか？」

「はあ？」

まあ、ケイの口が悪いのだけが欠点だわさ……シズクは良い子だけどね。

一日で四五行の三分の一を終わらせるなんて本当に理不尽だわさ。今回初めて天才って部類の奴らと真面目に関わったけど、こんな余程心が強くないと途中で投げ出すわね。自分が数年かけてやってきたことを数日で修め、日が進むごとに自分が何時か抜かれるという現実と向き合わないといけない。

教える立場ってのは思っていた以上に奥が深いみたいね……残酷だわさ。今回ばっかりはジジイが羨ましく感じちゃう。

それにしても、この二人よくここまで堕ちずに来れたわね。

両親がいない状態で流星街を生きていくなんて、相当な地獄を見てきたはずなのに自分たちを生んだ両親を恨まず笑い飛ばせるなんて、強い子たちだわさ。

……この子達は立派なハンターにして見せる。

これは、身の上話を聞いたからでも念を教える裏試験官としてでもなく、ストーンハンターとして原石を磨く事に手は抜かないというこれまでのハンター人生で貫き通してきた意地に賭けてやってみせるわさ！

その為にも明日からの修行内容は四大行の応用まで見据えた計画を組んでいくわよ！

本当にこの二人はバランスが良いわね。

嵌まれば強い力を発揮する具現化系と戦闘において最もバランスが良い強化系。二人がそれぞれ足りない部分を補填しあえる関係になれる。

これからはそれぞれの長所を伸ばせるような修行にシフトした方が今後の二人にとつては良いでしょうね。明日からは、修行と同時並行で長所探しとか本人がやりたいって言ってる分野を伸ばす方向で進めて行くとして、その他にも個別でアドバイスも増やして。ああ、それと『発』の修行計画も綿密に立てないと……。

あゝあゝあゝー！本当に原石つて磨くの楽しいわね！

ケイは、かなり念に対して頭が柔らかいわね。

自分の中で実際に念を使った戦いがどうなるかを考えて修行してた。その結果『堅』の修行に到達してたしかなり筋が良いわ。シズクもシズクで自分で何かを考えて挑戦するケイみたいな積極性はないけど、一度やると決めたことをずっとやり続けられる才能をもってる。

うん、悪くない。

ただ、舐め腐った態度だけは矯正しないとダメね。

念を教えてから三か月。

この期間は、じつくりと基礎を固めたからね。そこそこの念使いには成長したわき。これからは、遂に応用編。念能力者の基本にして真髓。

どこまで成長するかは分からないけど、手は一切抜かないわき。

シズクの成長が凄いわね。

特に『周』は、文句の付け所が無い。習い始めて数日で完璧に使いこなしてる。ケイもそれを隣で見ても肌で差を感じてるせいかな修行に力が入っちゃってるわね。今までは横並び状態で進んで行ってたのに、差が目に見えて始めたことで焦ってるって言ってたけど……それにしても変なところでガキな部分が出てるわき。

本当は今まで自分が守ってた女の子に抜かされて焦ってるだけでしょ。ソレを修行のせいにして……本当に青いわねエ。

まあ、ソレを本人に言っても悪態ついて誤魔化してるけど、しつかりと向き合いなさいよ自分の気持ちと。アンタがいつも一緒にいる相手は、ずっと一緒に居られるわけじゃない。ハンターなんて危険な仕事してたらいつ会えなくなってもおかしくない。

それを早く自覚しなさいな。

攻防力組み手をして分かったけど、ケイは実戦における『流』が得意みたいね。それにしても、シズクは『周』の才能を発掘したときにあんなに大人しくて良い子だったのに……それに比べてケイは、すぐ調子に乗ってアタシに勝てるとか言い出すし、本当に単純バカね。

なんでシズクはこんなバカに捕まったのかしら。

毎日攻防力組み手をしてるけど、ケイの『流』の成長は早い。シズクを置いていく勢いで成長してるわさ。今なんてアタシとの瞬発組み手になってるし、師匠として一番最初に抜かされる分野はどうやら『流』みたいね。もし、このままの速度で成長していくなら元の姿に戻っての修行も視野に入れた方が良さそうだわさ。

シズクもケイの成長速度に隠れてるけど異常な速度で成長してる。特に最近、アタシたちが組み手をしてる間に『周』の鍛錬をしているのか、物に纏わせるオーラの流れが洗練されて行ってるわさ。あれは具現化系としての『発』を開発したときに本領が発揮されると見たね。二人とも念能力者としての戦闘基本を学んでる状態だけど、『発』を作ったときにその積み重ねが開花する。その原石が宝石としての片鱗を見せる瞬間、ソレが近いとストーンハンターとしての勘が言ってる。うふふふふふふ、楽しみだわさ。

シズクの『発』は、流星街出の生活からかなり影響を受けてるわね。生き物以外を吸い込む掃除機と念能力を吸い込む掃除機。……自分の育った環境がかなり嫌いだったんでしょーね。そうでないと生き物以外を何でも吸い込む掃除機なんて普通思いつかないし、思いついたとしてもこんなに早くイメージが固まるはずがない。

昔の生活が相当心に残ってるんだわさ。

本当にバカだわさ！

なんで相談しないで勝手に能力作ってんのよッ！今までの修行計

画が台無しになっちゃうしよーが。なーにが「必殺技は隠してこそカッコいい」だわさ。普通は、そんな理由で念能力作んないのよッ！でも、こればかりはケイのバカさ加減を理解してなかったアタシが悪いわね。シズクは何にも驚いていなかったし、普通にケイが『発』を作ってるのに気付いてたんでしょーうね。

まあ、散々文句は言ったけど能力自体は本当によく出来てた。

オーラを刃状の鞭に変化させる能力。使いこなすことが出来れば近・中距離の戦闘において無類の強さを発揮できるはず。何よりも相手に能力がバレても問題ないかつ間合いを簡単には測らせないのが戦闘向きで良いわね。それに、最後まで能力を隠しておけばここぞという時の切り札になりえる攻撃力も持つてる。

バカが考えたとは思えない能力だわさ。

ただ、明日からは要練習ね。……アタシも次から元の姿に戻ろうかね。

念能力を使つての実戦形式の修行に入ったけど、二人とも流星街で暮らしてきたおかげか戦闘中の戦闘考察力が非常に高いわさ。まあシズクに関しては掃除機持ったまま闘えるか不安だったけど、しっかりと動けてたし後は経験を積んでいくだけね。

ケイは、思った以上にブレードが厄介ね。この前聞いた限りでは、単純な能力だから逆に弱点も少ない程度の認識だったけど、実際体感してみると変わった。ブレードの数や出現場所、伸びる距離すべての要素がブラフになるし本命にもなれる。普通のパンチもブレードが出れば簡単には避けられない、数によっては面の攻撃にもなれるし……良い能力だわさ。

そろそろこの子達から離れないといけない。

ハンター十か条の一　ハンターとは何かを狩らなければならない。アタシは、ストーンハンターとして原石を磨くというハンターにおける一つの狩りをケイとシズクを育てることで完遂した。であるならば、次の狩りを目指すのが当たり前。一つの場所に居ても狩りをしていないなどハンター失格だわさ。

だから、離れないといけないけど……アタシは親の気持ちになっちゃってる。

今の環境が心地よくて離れたくない。そう思ってる。

他の試験官が見ればアタシなんて教える立場としては失格も失格、落第レベルって言うわね。本当なら試験を合格するのに、自分の気持ちを優先して何も伝えずズルズルと時間を伸ばして一つの場所に拘束する……ほんとにダメだわさ。

二人に心配かけちゃったわね。

アタシの様子がおかしかったのかシズクがこまめに話しかけてくれた。ケイも気になってたのかいつもは聞かないような体の心配とかしてくるし逆に調子狂っちゃったわさ。

明日でお別れすべきね。

「はい、終わり」

そう言っただけは大人から少女へと姿を変える。その姿には余裕があり、まだあまり疲れていないことが見て分かる。それに対して四肢を投げ捨てるように地面へと寝転がっているケイとシズクの二人。疲れ切っているのか死んだ魚のような顔をしていた。

「また負けたあ！どうやったら最終形態に勝てるんだよ」

「ビスケ強すぎるよー、どうやったら勝てるの？」

「まあ、アンタ達に必要なのは念戦闘の経験ね。そればかりはアタシだけじゃ教えらんないとこだわさ」

三人になってからの日常。ケイとシズクの二人がビスケに負け地面に転がり、文句を言いながらも反省会を行いその日の修行を締める。

——そんな毎日。

「……これ以上はアタシから教えることは無いわね。合格だわさ二人とも。これで修行も終わりよ」

ビスケの言葉を聞いて二人の動きが止まる。二人とも何を言われたのか頭で処理できていないのか呆けた顔をしていた。

「え？まだ一回も勝ってないのに合格？」

「は？どういうこと？」

「元々、裏ハンター試験つてのは四五行を教えた時点で終了。今まで続けてたのはアタシのわがままみたいなもんだわさ。だから、二人とも今日から正式なプロハンターよ！」

そんなビスケの言葉を聞いても納得できていないのか、まだ困惑した表情の二人。

「合格で良いけど、ババアに勝ちたいし俺はこのまま修行してえー」

「私達、大人ビスケに勝ってないしこのまま続けたい」

（うう、な、なんて嬉しいこと言ってくれるんだわ。さ。そんなこと言われたら離れられなくなっちゃうわよ。）」

「それは嬉しいけどダメ！アンタ達もハンターになったんだったら、何かを狩るハンターじゃないといけないの。こんな所で修行をしてるだけじゃあハンター失格だわさ。……それに何でもかんでもアタシが教えちゃ逆に二人の才能を潰すことにもなるからね。これから自分たちで頑張んって行く、そういう時間よ」

「ん。ん。ん。確かにババアに教えてもらうだけつてのも……自分で成長したことになるねーのは分かるけども……」

「でも、ビスケに教えてもらった方がやりやすいのにー」

「んあ、も、もう！とにかく明日からはプロハンターとして自分の欲し

いモノをハントしなさいな！ほら、いったいった！」
こうしてケイとシズクの裏ハンター試験は終わりを迎えた。

現在三人はジャポン中央空港へと来ていた。

「忘れ物ない？航空券持つてる？ミンボの地図も忘れてない？」

「だから持つてるって！しっけーよ」

「アンタ達変なところで気が抜けてるから心配なんだわさ」

「それにケイはさつき航空券忘れてたしねー」

「いや、あれはシズクが持つてると思っただけだし、それに実際持つてたからセーフ」

ケイとシズクは、修行が終わったあと今後どうするか迷っていた。

念の修行に集中していたため頭から消えていたが、当初は自分たちの欲しいものを探すために旅に出ていた。なのに何も欲しいものを見つけていない。それで少し悩んでいたが、最終的には旅の続きをすることで落ち着いていた。そうして話を進めっていると、丁度良くメンチから連絡が来た。

内容は、ハンター試験に合格してから一年以上も会っていないから久しぶりに遊ぼうという誘いの連絡。どうやら俺達が裏ハンター試験を合格するのを待っていたらしく、終わったのを知ってすぐ連絡を入れたということらしい。

そして翌日、ビスケへ感謝のお礼を言ったあと、すぐ空港へと向かっていった。……のだが、無事に行けるか心配したビスケが空港まで二人に付いていくと言いだした。

——そして現在。

「二人とも健康には気を付けなさい。ハンターにとっては病気が一番怖いからね。自分の身体は商売道具だつてことを忘れるんじゃないわよ。あと、仕事を受ける時は自分の身の丈に合った条件で受けること！身の丈以上の仕事は死に直結するんだわさ。それから……修行を怠っちゃダメ。念は筋肉と同じで動かさないと鈍るからね。あと

は……困ったことがあつたらすぐ連絡しなさい。絶対駆けつけるから。もちろんタダじゃないけどね。三割引きくらいにはしとくんだけわ。それから——」

そう早口でまくし立てるビスケを二人は呆れた顔で見ている。ビスケもその視線に話している途中で気が付いたのか少し恥ずかしそうな顔で話を止める。

「——ん、ん、ん、ま、まあ気を付けなさい」

「アンタは俺らのかーちゃんかよ」

「ビスケならお母さんでもいいよ」

「な、なに言ってるんだわさッ！お母さんじゃないわよ！ただ心配しただけ！」

そうして三人で楽しく話していると、ミンボ共和国行き飛行船案内アナウンスが流れる。

修行に入ってから一年半。

宝石の原石。そう評するのが正しい二人。私はここまでの才能を持った人間を育てたことがなかったから分からなかったけど……教育者にとって一を教えて百以上を覚える才能程怖いものはない。自分の努力が一瞬で抜かれるという恐怖感。それがある。

でも、その何百倍も教えるのが楽しい。

自分の教えたこと以上のことを学び糧にし成長する。それがどこまで行くのか見てみたくなる。だから、離れるのにここまで掛かってしまった。

ただそれも、やっと終わる。

「……じゃあ、二人ともいつてらっしやい」

少し寂しそうな顔をしながらも笑顔で二人を送るビスケ。

別にこれが一生の別れっていうわけじゃない。連絡先も持つてるし、調べようと思えばハンターサイトで調べることが出来る。だから、何の心配もない。

でも、やっぱり少し寂しい。

「うん、行ってくるね」

「おう、行ってくる」

念の修行を始めてから一年半。

ようやくケイとシズクのプロハンター人生が幕を開ける。

新人プロハンター日記

×月×日

久しぶりのぶらり二人旅。

今日は、ジャポンからミンボ共和国に移動する飛行船の中で過ごした。予定では明日の昼には着くはずだから今回はそこまで長旅じゃない。それに前みたいハンターライセンスを使つての移動だったから快適だった。

それにしても一年半以上、三人で暮らしてたせいか少し物足りない感がある。……ハンター試験でシズクと離れた時とは違うなんか変な感覚。うーん、なんて書けばいいのか分らんけどなんか変なんだよな。シズクも少し静かだったし、もしかしたら思ってた以上にあの生活が好きだったかもな……。

×月×日

ミンボ共和国到着。メンチ合流。

約一年半ぶりのメンチ。身長が少し伸びてた……けど、他はマジでなんも変わってねえ。いつも通りのマシンガン Took、大きな声は健在だった。あと、料理の才能も。

本当にメンチと同期で良かった。タダで美味しい飯が食えるって最高。

×月×日

あの野郎やりやがったッ！

普通に再会記念で料理を作ってくれたから合格祝いの時と同じでタダだと思つたのにッ……しつかりとお金をとられたッ!!しかも、高級食材をふんだんに使つたプロハンターの料理つてことで600万ジェニー請求書を添えて。

当たり前だけど仕事をしていない俺達がそんな金額を払える訳も無く……。暫らく三人で仕事をすること手で打って貰った。「馬車馬の如く働かせてやる」とめちやくちやイイ笑顔で言われまし

た。シズクにはめちやくちや優しくしてたのに俺だけ当たり強いとか、ババアもそうだったけどみんな俺のこと嫌いか？

……でも、冷静に考えたら600万ジエニーと一緒に仕事するだけで無かったことにしてくれるとか、もしかして神なのか？

×月×日

どうやらメンチの計画通りに事は進んでるらしい。メンチはしっかりと仕事を決めてた。

ミンボに来る前は、一週間くらいは遊ぶかと思ってたけど、明日にはパドキア共和国に移動ということで遊びはナシです。しかもゴ丁寧に俺達の分の航空券も向こうが手配してた。

……マジでやってんなあ。

×月×日

パドキア共和国到着。

俺達の最初のハントは、パドキア北西にあるドキ草原に棲むブンラ牛鷲を獲るという難易度Eレベルの動物狩り。

ブンラ牛鷲とは、牛のような巨体に鷲の翼をはやした四つ目の高級食材。巨体に見合わない俊敏さを持ち非常に鋭い足の爪や頭の二本角は鉄を貫くなど危険な生物でもある。また、群れることで凶暴性を増すなどの厄介な特性を持っている。

ブンラ牛鷲の捕獲目標数は10体。

×月×日

念能力ってマジでスゲー。

念の使っていない野生動物に負ける可能性が1mmも存在しない。マジで負ける気がしない。念を習う前までの俺達なら二人で狩るような相手だったのに、普通に一人でやれた。

なんか、こういう前までだったら狩れなそうな動物を狩ると念の凄さを実感する。

×月×日

目標数達成。

捕獲したブンラは、一体だけ今日のキャンプで食べ、残りはメンチが自宅で料理するらしい。何でも今考えている創作料理の出汁として最適なんだと。

晩御飯は、今日獲ったブンラを使ったバーベキュー。美味いだろーとは思ってたけど、所詮ただ焼いただけの肉。舌の肥え始めてきたこの俺らの舌を唸らせられる様なモンにはならねーだろうと思ってたが……俺が馬鹿なだけだった。高級食材を馬鹿にした訳では無いけど、想像の五十倍上を行ってたわ。特にタンは最強だった。普通に焼いただけでも肉の旨味と弾力が丁度良くマッチしてうめーのに、それに加えて塩コシヨウ・メンチの自家製タレを使った味付けが同じ部位なのにそれぞれが違う印象を与える美味しさがあった。死ぬほど食いました。

×月×日

帰宅。仕事がひと段落ついたという事でパドキア共和国のホテルまで帰ってきた。

メンチのことだから続けて仕事をするのかと思っていたが、そんなことにはならなかった。どうやら今回捕獲したブンラの調理研究をすぐ帰って始めたいらしく、ひとまず明日で解散することになった。とりあえず今日は、仕事終わりという事で休暇も兼ねてめちゃくちゃ遊んだ。観光でゾルディック家が住むというククルーマウンテンまで行ったが雰囲気は凄かった。あそこ魔王住んでそう。

×月×日

メンチが帰っていった。

今回無理やり仕事を手伝わされたとはいえ、三人でワイワイ騒ぎながら仕事するのは楽しかったな。シズクも楽しそうだったし、正直このまま美食ハンターとしてこれからやっていくのもアリなのか……？一応、これからも仕事をやる際には連絡を寄こすらしいし、どうや

らなし崩し的に美食ハンター入りする日も近いかもしれない。

まあ、でもとりあえずは最初の目的であるやりたいこと探しをメインに旅を続けていくか……。

×月×日

やりたいこと探しの旅 一日目

パドキア共和国観光。大目玉のククルーマウンテンはもう行ったから今回のメインはショツピングとパドキアの郷土料理に焦点を当てて遊んだ。

×月×日

やりたいこと探しの旅 三十日目

そろそろ金銭的な問題が出てきそうだから仕事を受けることにした。今回は裏ハンター試験を合格しているという事もあって簡単に仕事を受けることが出来た。てか、前回からは想像できないようなめちゃくちゃ丁寧な対応だった。マジで最初からそうしとけよなって。ホント協会さん掌クルツクルよな。

×月×日

やりたいこと探しの旅 七十日目

ミンボ共和国到着。前回来た時はまともに遊べなかったが今回は違う！俺達は遊びに来たぞーミンボーー!!!とりあえず有名な料理屋は何処だツ!!

×月×日

やりたいこと探しの旅 百三十日目

久しぶりにメンチから仕事の誘いというか強制依頼の連絡が入った。今回はあいつに騙されないように万全の準備で向かう。シズクは別に気にしてないのか呑気に久しぶりにメンチの料理が食べたいと言ってた。

……シズク、お前はなああいつに甘やかされてっから別にいいかも
しれんけどなあ!!お、おれは、アイツにバカにされ煽られながら馬車
馬の如く働かされるんだぞッ!

×月×日

やりたいこと探しの旅 二百十二日目

初めてカジノに行った。ポーカーとかいうカードゲームバカ難し
くないか?どうやったら運以外の要素がアレに絡んでくんだよ。ポ
ロクソに負けたんだが?

一方シズクは、ルーレットで大当たりしてた。

シズクさんやワシに少しだけお金を恵んでくださらぬか?ダメな
ら貸しでいいからさ。だから、ほんと少し、マジで少し、ちよびつと
だけ頼む!!貸してくれたらその金で一発当ててくるからッ!

だから、五万貸してくんね?

×月×日

二日ほど意識が戻らず寝たままだった。体中が痛い。少し体を動
かしただけでも体が悲鳴を上げてるのが分かる。

二日前、小遣い稼ぎの仕事を終わらせたタイミングで三人組が話し
かけてきた。筋肉ダルマと黒髪イケメン、金髪イケメンの三人。最初
は無視して足早に去ろうとした:けど、そのうちの一人が流星街にい
た頃にお世話になった金髪あんちゃんだつてことに気付いた。名前
は憶えてなかったけど顔は憶えてた。

金髪あんちゃんの名前はシャルナーク。俺達が名前を忘れてるこ
とに気付いて向こうから教えてくれた。

今回ここで会ったのは、偶然じゃなかった。しっかりと裏情報サイ

トで調べた上での接触だった。そこまでして俺たちに会う理由。それは盗賊グループへの勧誘。13人で構成されたAクラス犯罪集団その一席に招待された。

ルールは少なく、それを守れば後は自由。誰も縛りはしない。なんだったら何かしたい時には、メンバーと交渉すれば手伝いもしてくれるフットワークの軽い集団。

——悪くない。そう思った。流星街を出てすぐだったら一瞬で了承するほどの好条件だった……けど、加入は拒否した。シャルさんは驚いてたけど、外の世界を知ってしまった俺達にはもうそんな選択肢は無かった。

そこから先は戦闘。筋肉ダルマVS俺達の初めての死闘。

結果は完全敗北。でも、俺たちは二人とも五体満足だし生きてる。内容的にはボコボコだったけど、最悪じゃない。まだやり直しが利く。

だから、次は負けない。

絶対に俺たちが勝つ。

シャルナークⅡリユウセイ

——ケイ！あの頃みたいにさ自由な生活に戻らない？

「え？どういうこと？」

「実はオレ達って幻影旅団っていう盗賊しててさ」

「え、なんで？……ケイならやると思ったのに。……あつ！シズクの心配してる？それなら大丈夫。別に蜘蛛に入っても二人の仲を引き裂くようなことはしない。ただ、仕事する時に呼ぶだけだからさ安心してよ」

「え、じゃあなんで……」

「――」

偶然だった。

二か月前、暗殺されてから空席のままだった8番。その席を埋めるための人材を探している途中、偶然見つけた二人。去年のハンター試験合格者名簿の中。その中に懐かしい名前があった。

——ケイⅡサトウ、シズクⅡムラサキ

流星街にいた頃、住処の近くにいた子ども達。両親がいなかったのかいつも二人で生活をしてた。まあ、両親がいないなんて話は流星街においては珍しくないというか当たり前、常識、普通のことなんだけど、あの二人は別だった。他の人と組むことなく正真正銘二人だけで生活をしてた。一言で言って異常。流星街で暮らしていくためには仲間が絶対に必要になる。それが流星街という場所だ。必ず一人では生きていくことは出来ない絶対領域。だから、流星街で暮らす人た

ちは、自分の仲間を大切にする意識が外の世界よりもずっと強い。仲間を殺された時には絶対報復するくらいにはね。

その環境であるの二人はだれにも頼らず生きていた。

ソレが凄くて気付いたら話しかけてた。はじめは警戒されまくりで一瞬でも変な動きしたら殺してやるみたいな雰囲気だったけど、向こうもオレが近くに住んでることは知ってたのか結構早く打ち解けた。あの頃の二人は小さくて、よくオレに外の世界について話を聴きに来てた。二人が流星街以外の世界を知らないこともあって、本当に楽しそうに話を聞いてくれた。オレもそれが嬉しくてよく話してたな。

その中でハンターに興味を持ってたのは知ってたけど……本当になつたんだな二人とも。

「あの二人なら……」

懐から携帯電話を取り出すとある男へと電話を掛ける。

「団長！実はさ紹介したい人がいるんだ。そうそう、もしかしたら8番になれそうだなって思ってたさ。……え、なんでウボオーもいるの!？」



「ケイ！あの頃みたいにさ自由な生活に戻らない？」

あの頃よりも伸びた身長、少し大人び始めた顔。変わったところはあるけど、あの生意気な目だけは変わってないや。シズクも美人さんになってるし……本当に大きくなったな二人とも。

「え、どういうこと？」

「実はオレ達って幻影旅団って言う盗賊しててさ。メンバーが13人と小規模だけど、一人一人が強い少数精鋭で活動してる結構凄いグループなんだ。そんな凄いメンバーなんだけど、つい最近一人死んじゃってね。今メンバーを探してるとこなんだ。まあ、だから何が言いたいかって言うとオレ達と一緒に盗賊やらない？」

「盗賊って言う物盗む系犯罪者ってこと？」

「そうだね。世界一凄い物盗む系犯罪者やってるよ」

——幻影旅団

13人で構成されたAクラス越えの盗賊集団。団長を蜘蛛の頭、残りの団員を12本の蜘蛛の脚として見立てて構成されている。団員それぞれにナンバーが振り分けられており、団長はナンバー0、残りの団員はナンバー1から12の刺青が入っている。団員それぞれがAクラス犯罪者として懸賞金が懸けられているが、今のところ熟練プロハンターでも手が出せない存在となっている。自他共に認める最強犯罪集団。

「俺は……やらない」

「え、なんで？……ケイならやると思ったのに。……あっ！シズクの心配してる？それなら大丈夫。別に蜘蛛に入っても二人の仲を引き裂くようなことはしない。ただ、仕事する時に呼ぶだけだからさ安心してよ」

「いや、別にそういう心配はしてない。それにその盗賊集団に入ったとしてもシズクと離れるつもりは無いしそういう心配は一切してない」

「え、じゃあなんで……」

「……単純に犯罪はしたくないから」

「——」

少し間を置いた返答。

そこに込められた意味の全てを感じ取ることが出来なかったがそれでも嘘は言っていないのは分かる。……ただ、本音ではないかな。いや、本音ではあるけど本心ではない……って感じか。もっと別の理由があるな

シャルナークは、それをたった一言から読み取った。

「じゃあ、シズクはどう？一緒に盗賊やらない？」

「別にいいかなー。ケイがやらないんだったら私もやるつもりなし」

「ハハッ、ダヨネー」

うん、知ってた。

あのいつつもケイの後ろにいて離れなかったシズクが少し環境が変わったくらいで直ってるわけないか……。

それにしても質問に対して全くの変化なし。完全にケイを信じ切ってる顔だ。……つまり分かってたんだ。ケイが入団を断ることを。でも、オレにはその理由が分からない。流星街に居た頃の二人なら絶対にこの誘いを断ることは無かったはず……。

—— 外の世界に出て何があつたんだ二人とも。

「なあ、こいつ等が入んねーってことはよお。ここで戦っちゃってもイイんだよなあ。シャル、団長」

「ああ、いいぞ」

団長直々のお許し。それが出たことで、ウボオーギンは今まで我慢していたオーラを解放する。そして、それに呼応するようにケイとシズクも戦闘態勢をとる。まさに一触即発。少しでも動けば死闘が始まるそんな空気に一瞬で切り替わった。

それを感じ取ったシャルナークは、一瞬で戦いの雰囲気纏い出した三人を止めるため急いで声を上げるが——

「団長！まだ、交渉終わってない！」

「シャル、でもアッチは戦う気らしいぞ」

「ちげーよ、筋肉ダルマが構えたからこつちも構えたんだろ！正当防衛だ！」

「アア？そんなのどうでもいいんだよ。構えたんならやろうぜエ!!!」

—— 誰も止まらない。

死闘

相手は、筋肉ダルマと黒髪イケメン、シャルさんの三人。

シャルさんは、戦闘するつもりは無いのかオーラに変化は無し。それに黒髪イケメンも変化なし。ただ、筋肉ダルマはやる気十分、オーラ全開の暴走列車になってる。

身長は2メートル超え、体格はガツシリとした頭まで筋肉詰まってそうな見た目。一見すると強化系だけど、ババアの前例があるから断定は出来ない。……が、THE強化系の見た目をしてる。

オーラの乱れや出力を見る限りでは、ババアレベルには達してない。それでも、俺達より数段上ではある。まあ、オーラの流れは荒々しいし制御しているわけでもない。がつつりパワーで押してくる気満々って感じだな。

それに対して俺達は、駆け出しの強化系と具現化系。

シズクは嵌ったら強いけど、強化系に全振りしてる相手だとそこまですぐ強くない。そして、俺は何処かで一発決められる隙さえあればワンチャンスあるくらい。

まあ、これが筋肉ダルマ対俺達の戦いって言うなら勝率は7対3。それくらいはある。けど、後ろにまだ二人も格上がいる。この筋肉ダルマと戦闘しながら後ろの二人も警戒して、途中参戦してくるなら対応する。それが理想的。

だけど、そんな戦闘は無理。なら、どうするか。答えは単純――

「反射的に戦闘態勢に入ったけど、どうか命だけは見逃して貰えませんかね？」

――命乞いをするだけ。

「ン？それはねーな。戦いは殺す殺されるの関係じゃねーと楽しめねエ。……全力を出して戦う。それが戦闘の面白れエところだが。生温いこと言ってるじゃねえよ」

予想はしてたけど、最悪だ。今一番相手をしたくないタイプ。話が通じない全力で殺しに来るタイプの戦闘狂だ。

「いや、でも3対2で勝てるわけねーじゃん」

「ああ、それは心配すんな。……団長！シヤル！……この戦いには絶対手エ出すな！！」

——けど、運は俺達に向いてるな。

それにしてもこういうタイプって、やけに一人での戦闘に拘るよな。……まあ、それに救われてるけど。とは言え、完全な2対1になつても不利なのは変わんねー。ただ、勝率は上がった。

だから、あとは覚悟を決めるだけだ。

「これで心配なくやれるだろ。さあ、やろーぜエ！！」

緊張感が増していく中、ケイは大きく息を吸う。

「シズク！攻撃は全部避けて無理に攻撃はしようとするな。とにかく当たらない動き重視で、攻撃は俺がやる！」

「りよーかい。いくよデメちゃん」

先手はウボオーギン。

オーラによつて強化された肉体は、その巨体からは予想できない神速を生み出しながらケイへと拳を振るう。……が、それを瞬時に見切ったケイはカウンターの蹴りを入れる。蹴りが綺麗に入ったウボオーギンは宙を舞うが、ダメージは入っていない。

逆に蹴りを入れたケイの足が少しだけ痺れる。

それを蹴られた感覚から見破っていたウボオーギンは、宙で身体を捻り地面へと足から綺麗に着くと再度ケイの方へと向かう。その速さは先程と変わらない。一瞬でケイへと近づき、もう少しで手が届くといった瞬間、意識外から衝撃が走る。

「うおお!!」

シズクの振るったデメちゃんがウボオーギンの脇を捉えていた。その細腕からは予想できないパワーと意識外からの攻撃。ウボオーギンは踏ん張ることが出来ず吹っ飛んでいく。

「ありがとうシズク。マジで助かった」

焦るな俺。今のはマジで危なかったぞ。

たどえ、相手に綺麗に攻撃が入るっていつでも力の調整はしつかりしろ!!!

「間に合って良かったけど、アイツ全然食らってないよ」

「ああ、分かっている。でも、一度仕切り直しが出来た。それで十分」

それにしても、あの硬さ化物だな。でも、スピードは対応できないレベルじゃない。避けるだけなら継続できる。ただ、あの硬さと予想されるパワーは明らかに俺以上。シズクも何とか対応したけど、次は無いつて考えたほうが良いな。

後は、どうやって攻撃を与えるかだけど……修行の頃を思い出せ！あの時のババアの言葉、それを忘れず対応すればヤレルはず……。

「今の一瞬だけだが、感覚的には強化系全振りのパワータイプって感じだな」

「うん。強さ的には、少女ビスケ以上大人ビスケ以下かな。あの感じだと、私の攻撃はダメージは入らないって考えていいと思う」

「ついでに俺の攻撃も基本的には通らないな」
落ち着いて情報を出せ。焦るな。

相手は、予想通りのパワーで押してくるタイプの強化系。耐久性やパワーは圧倒的に向こうが上。でも、今さっきの感じだと、たとえ本気を出してもスピードは俺のほうが上。ただ、シズクは心配だな。アレ以上になると対応出来ない可能性が高い。そう考えると……。

「……シズク、お前は少し離れた位置で待機してて欲しい。あまりにも相性が悪すぎる」

その言葉にシズクは焦った顔になる。

「それはダメだよ。ケイが一对一で戦うことになっちゃうじゃん」

「でも、それがベストだ。……それに別に戦いに入るなって言ってる訳じゃない。俺がアイツに傷を入れたら発を全力で使ってほしい」

「——分かった……けど、危なかったら乱入するから」

「ああ、頼む」

ちようど作戦会議の終わった所でウボオーギンが戻ってくる。その顔に焦りはなく寧猛な笑みを浮かべている。

「その女。近接は出来ねエと思ってたが、案外ヤルじゃねーか」

「どうも」

「それにしても具現化系と強化系のタツグか……悪くねエ。もしオレ以外が相手だったら負けてたかもな」

「じゃあ、チエンジで」

ケイのあまりに無遠慮な物言いにウボオーギンは笑いが止まらない。

「ククク…そら無理だ。オレが闘いてエからな。……じゃあ、準備運動はこれくらいにして、こつからは本気で行くぞ。オメエら!!!」

三人はほぼ同時に地面を蹴る。ウボオーギンとケイは前へ!!!、シズクは後ろへと移動する。そして次の瞬間、ウボオーギンとケイが衝突する。

先に手を出したのはウボオーギン。オーラで強化された右拳。それがケイの顔面目掛けて向かってくる。ケイは、それを攻防力70の左腕で逸らすと、瞬時に右拳へと攻防力60のオーラを流しガラ空きの胴体へと振るう。無防備な胴体へと当てたように見えたが、それでもウボオーギンにあまりダメージが入っているようには見えない。

「くっ!」

ウボオーギンは一瞬耐えるような態勢をとるが、攻めの姿勢は崩さない。自身の胴へと拳を叩き込んでいるケイに向かって拳を振るう。…が、当たらない。逆にカウンターとして顔面へとパンチを食らうが——無意味。ダメージにはならない。

「こつ……のオ!!!動き回るなア!」

「アンタの攻撃当たったら死ぬんだよオ!」

次の瞬間、ウボオーギンは地面へと拳を叩き込む。

地面が揺れると同時に視界が土煙で染まる。直後、ウボオーギンの気配が一瞬で消えたことに気付く。遅れてケイも隠で気配を消そうとして……止める。

遅れて気配を消すことは位置のバレているケイにとっては下策。もし無防備な状態であるウボオーギンの攻撃を食らえば即死確定なら、やるべき事は飛んでくるであろう攻撃に対して即座に防御態勢を取ること。そのためにも相手の攻撃を止まって待つことしか選択

しかない。

それを一瞬で導き出すと、感覚を研ぎ澄ませる。

「……ッ！」

時間にして数秒。静寂が流れる。

たとえ数秒でも、相対しているケイにとっては数時間にも感じる短くも長い時間。時が進むごとに増す緊張感と消えていく土煙。それを感じ取りながらただただ待つ。

そんな時間も終わりが来る。

——背後からの右ストレート。風切り音が聞こえた瞬間、倒れこむように全力で前へと飛び出す。ギリギリ……本当にギリギリ、紙一重でウボオーギンの攻撃を躲す。

だが、それだけでは攻撃は止まらない。畳みかけるように右、左と拳を振るうウボオーギン。ケイは、躲すのが間に合わないことを感じ取ると瞬時に方向転換。拳のラツシュを迎え撃つために、ウボオーギンの攻撃に合わせるように拳を振るう。左右の攻防力を瞬時に振り分けながら全力で防御する。

まさに神業。一瞬でも振り分けを間違えれば死ぬ。そんな考えが頭に過りながらも集中は切らさない。

「あつあああああッ!!!」

そうして何とかラツシュを捌き切ると、一瞬出来た攻撃と攻撃の間を縫って、ウボオーギンの顎目掛けて攻防力80の蹴りを放つ。ソレを食らったウボオーギンは思いつ切り後ろへと吹っ飛んでいく。

「……グゴあッ!!!」

一見すると蹴りは綺麗に入ったように見えたが、それを無防備に食らうような相手ではない。ウボオーギンも何とか攻防力60程度のオーラを移動させ防御していた。……が、完全に防御することは不可能。

戦闘が始まってから初めてウボオーギンに明確なダメージが入る。口から血が流れている。

だが、ケイも先程のラツシュでかなりのダメージを負っていた。特に左拳。あの数十の拳の応酬の中で一度だけ、ほんの一瞬だけ攻防力

の配分を間違えてしまったことで左拳が砕けていた。もう戦闘では使えない。……そう感じながらも拳を構える。

たとえ重傷を負ったとしても今は戦闘中。休む暇は無い。

「今のは結構効いたぜ」

「嘘つけッ！そんなに食らってねえ癖に!!」

実際、ウボオーギンを見てもそこまでダメージが入っているようには見えない。……が、それでも確かに血を流している。

攻防力80を込めた攻撃でやっ通る程の防御力。その硬さ……まさに怪物。

「そんなこと言うなって……まあ、今度は食らわねエがよオ!!!」

そう言うとうボオーギンはケイに一瞬で近づき顔へ右ストレート^{!!}を放つ。

ケイは首を傾けることで避けるとウボオーギンの後ろに回る。ただソレをしつかりと眼で追っていたウボオーギンは、体を振じり勢いをつけながら後ろ目掛けて全力の裏拳を放つ。

自分を追っている攻撃に気付いたケイは、その場でしゃがむことで回避をするとウボオーギンの太腿を蹴り飛ばす。足蹴を食らったことで態勢の崩れたウボオーギンに対して追撃するように回し蹴りを食らわせる。

「甘エなあああ!!!」

一瞬、吹っ飛んでいったウボオーギンだったが、次の瞬間にはケイの目の前に――。

先程と変わらないただの右の大振り。ケイは、半歩後ろに下がることでソレを軽く避けると、顔面へと攻防力70を込めた拳を叩き込む。……が、ウボオーギンは吹っ飛ばされることなく大きく後ろにのけぞるだけで終わる。次の瞬間、自身に叩きこまれているケイの手を取ると思いつきり地面へと叩きつける。

「――ッあ」

背中から地面へと叩き込まれたケイは一瞬息が止まる。瞬時に背中をオーラで守ったとはいえ、衝撃まで完全に防御することは出来なかった。

そんなケイに対してウボオーギンは全力の「発」を使う。
「ビッグバンインパクト超破壊拳!!!」

——「発」を使った本格的な修行が始まった頃

どんなにブレードを使ってもババアに当たることはなく、一方的に負けるだけの毎日だった。どうやればこの化物に勝てるのか。そんなことを毎日考えながらババアに挑む日々。

その時の俺は、ブレードをただ相手を斬るための道具としてしか見てなかった。まあ、それ自体は間違いじゃない。ブレードの使い方は、斬ることで間違っていないし、俺もそのつもりで作った。でも、それは刃物を持った人間とんでも変わらない。

その時は、まだ念能力者としての戦い方を理解していなかった。

そんなある日、ババアが質問してきた。

「ケイ、アンタは自分の発をどう運用すれば強いと思う?」

ババアにボコボコにされて作戦も上手くいかず、自分の中でのイライラが溜まっていた中での質問だったから鮮明に覚えている。

「そんなの先手必勝。相手が俺のことを警戒する前に全力のブレードを叩き込む。それが一番でしょ」

「まあ、半分正解ね。」

そう言うババアの顔は真剣だった。

「正解は、ここぞという瞬間に使うこと。確かに、アンタの能力は最初から相手に見せても十分強い。特にその鞭という性質は、相手が瞬時

に対応するのが難しいだろうしね」

「なら——」

「でも！それだと格上には勝てない。今のアタシとの戦闘みたいに綺麗に対応されるんだわさ」

「——ッ！」

確かに俺は勝てなかった。

自分なりにババアを倒す作戦を立てても、基礎値の絶対的な差がそれを悉く打ち砕いて行った。それくらいのアドバンテージが当時の俺とババアの間にあった。

「アンタの使うブレードは、確かに強い。実際に相手して分かったけど、近接戦においてこれほど厄介な能力は無いと思う程にはね。でも、落ち着いて対応できる範囲内だわさ。まあ、アンタがこれから成長していけばその差も無くなって、対応が出来なくなると思うけど……それは今じゃない。それに対応できなくなるのも最低でも数年先の話だわさ。その間ずっと格上から逃げるなんてことは出来ない。」

俺の数倍は生きてきたからこそ出てくる言葉。その一つ一つが重くのしかかる。

「——絶対にその時は来る。それに逃げられない戦いを強いられたいらどうするの？……例えば、逃げればシズクを殺すなんて言われたりしたら。そんな戦いで負けるなんて嫌でしょ？」

そんな状況になるなんて……。無いとは言わない。転生してからどれだけこの世界が残酷なのかはたくさん見てきた。理不尽にあふれたこの世界で生きていく中でそんな状況に陥らないとは言えない。だからこそ、容易に想像することが出来た。

シズクが人質に取られる状況を——。

「——ああ、絶対に嫌だ。」

「なら、これから言うことを頭に叩き込みなさい」

発を使って格上と戦う時の LESSON 1——

土煙が明けると、クレーターの中心でウボオーギンが一人立っていた。その足元には血だまりと動かないケイ。

「良い戦いだったぜ小僧」

勝敗は一目瞭然。ウボオーギンの圧勝。

「今回はその戦いぶりに免じて命は取らねエ。……と言うよりも、同じ流星街出身、敵対してるならまだしも今回はただの勧誘だ。最初から命まで取るつもりはねえよ。——だから、そこで止まれ女」

ウボオーギンの背後5メートル。その位置でデメちゃんを構えたまま止まるシズク。もし、一步でも進めば自分の首が飛ぶ。そう感じるほどのプレッシャーがシズクの足を止めた。

「じゃあ、ソコから退いて。ケイの治療がしたい」

「ああ、いいぜ——ッ！」

——瞬間、閃光が走る。

次の瞬間、ウボオーギンの左腕が飛ぶ。

——LESSON 1. 発は確実に重傷を与えられるタイミングだけに

意識のない暗闇の中、思い出したビスケ師匠との修行。

「もし、シズクを人質に取られたらどうする？」
「そんな最悪な状況。そうならないために頑張ってきたのにこの様。結局ブレードを使うタイミングが無かった。」

アイツのあの一発を食らう瞬間に全オーラを両腕に集中させ防御

したけど……この感じだとダメだったかな。

……悔しいな。死にたくねえ。

「せめてシズクが逃げられるだけの時間稼ぎがしたい。アイツは、絶対に死なせたくない。あんな良い子を死なせるなんて俺が許せないッ！」

「だから、起きろッ!!!!!!
身体を起こせエ!!!!!!」

——瞬間、視界が暗れる。

自分の目の前にいるウボオーギンとシズク。まさに戦闘が始まるといった状況。ソレを認識した瞬間。全力で右腕を振り上げる。

ウボオーギンの左腕が飛ぶ。それと同時に体を無理やり起こす。

「逃げろおおおー!シズクッ!!!!」

身体が悲鳴を上げてる。「もう無理だ!」「動けない!」そう叫んでいる。それでもケイは止めない。この瞬間。神様のくれたこの数瞬。ソレを逃せばシズクが死ぬ。そんな強迫観念がケイを突き動かした。

そんなケイをシズクが抱きしめ止める。

「ケイ!!!もう大丈夫……大丈夫だから」

「あえ。で、でも、あの筋肉ダルマがお前のこと殺そうと——」

そこでおかしいことに気付く。あの筋肉ダルマが目の前にいるのに襲ってこない。それどころか此方を見てニヤついている。

「気を抜いてたとは言え一瞬で腕を飛ばすなんてヤルじゃねーか」

「な、なんで……」

「なんか最初から殺す気なんて無かったんだって」

「は、はあ?」

いや、今さっきまで本気の殺し合いしてたのにそれは無いだろ。しかも最初に「戦いは殺す殺されるの関係じゃねーと楽しめねエ」とか抜かしてただろ。

「アッハッハッハ!!!ああ言わねーと全力出さないとってな。……でも、面白かっただろ?」

「——アンタ狂ってるよ」

「そりゃあオレにとっては誉め言葉だな」

そうして人生初めての死闘が終わった。